

特118

30

時事新報工場大震災復興録

山内宣男著

時事新報社工務部編

国立国会図書館

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





時事新報  
工場新報  
大震災復興錄



時事新報社工務部編纂



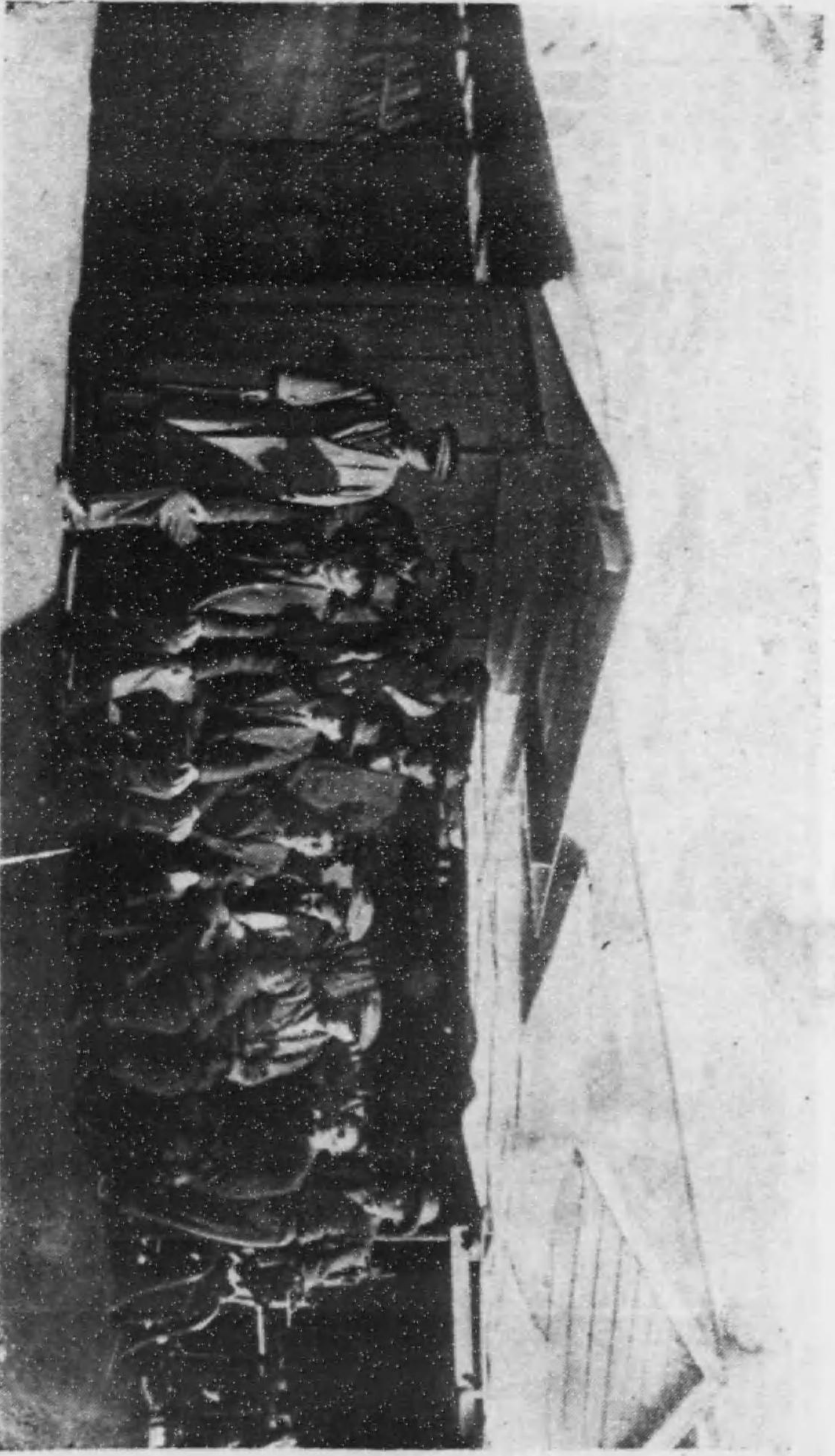
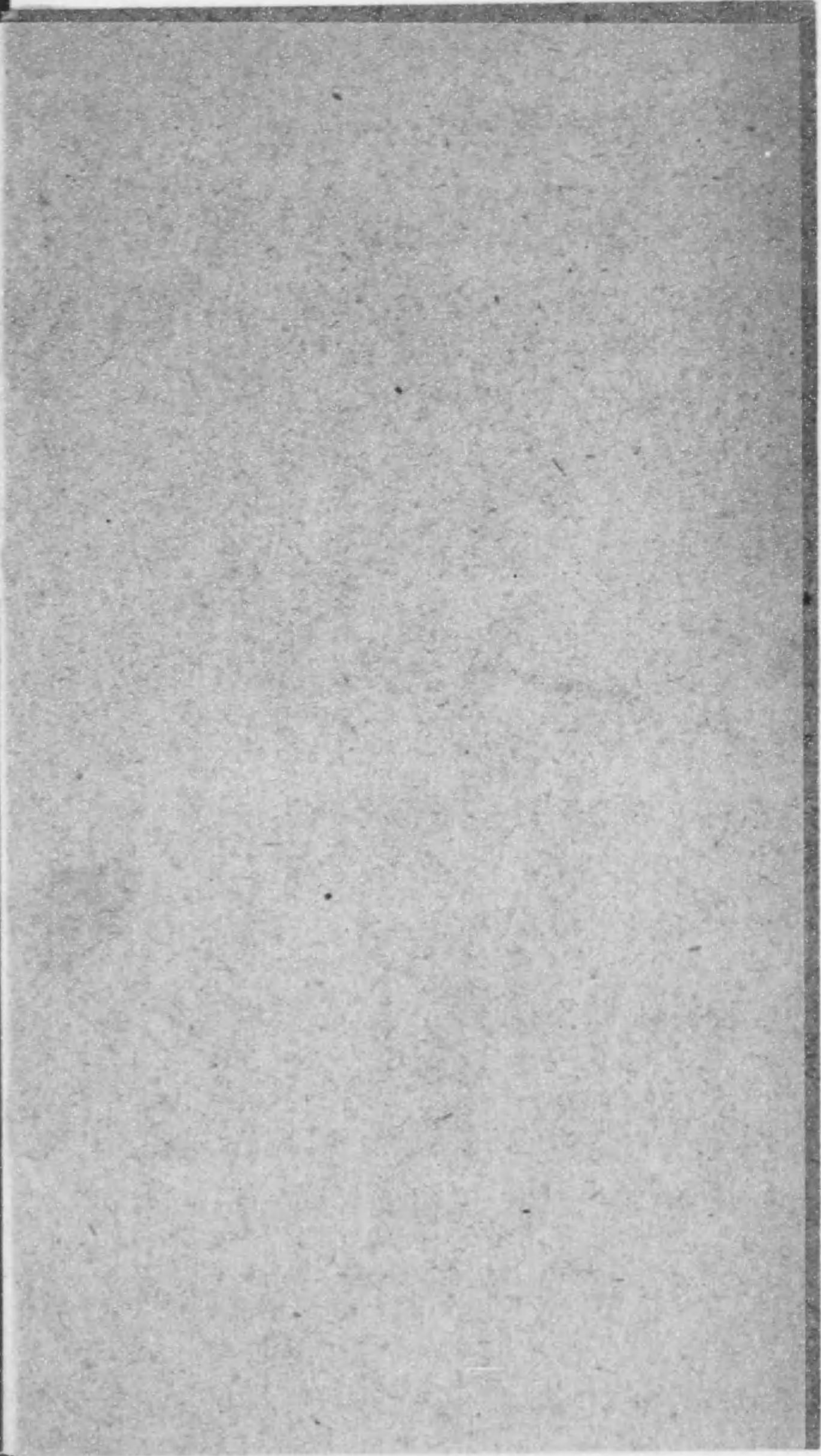
## は し が き

大正十二年九月一日の大震災に忽然として焼失してしまつた時事新報社は其瞬間より復興の芽を萌し  
同じ年の十一月中旬に同じ場所にヨリ以上の大建築とヨリ優れる諸設備を整へて華々しく復興を遂げ  
た、云ふまでもなく新聞社の復興は工務が先驅でなければならぬ、従つて罹災より復興、復興より發  
展に至るには工務關係のことが最も多い、仍つて我工務部は此の一大事實を有の儘に記述して永遠の  
記念たらしむべく部内有志の寄附金を以て本書を刊行した次第である、編輯は出来得る限り本社復興  
に關する各方面の事情を網羅する様に努めたが多忙の間致事に多少の繁雜あるは後しめ閱讀者の御諒  
恕を乞ふて置く。

大正十三年九月一日 大震災一周年記念日

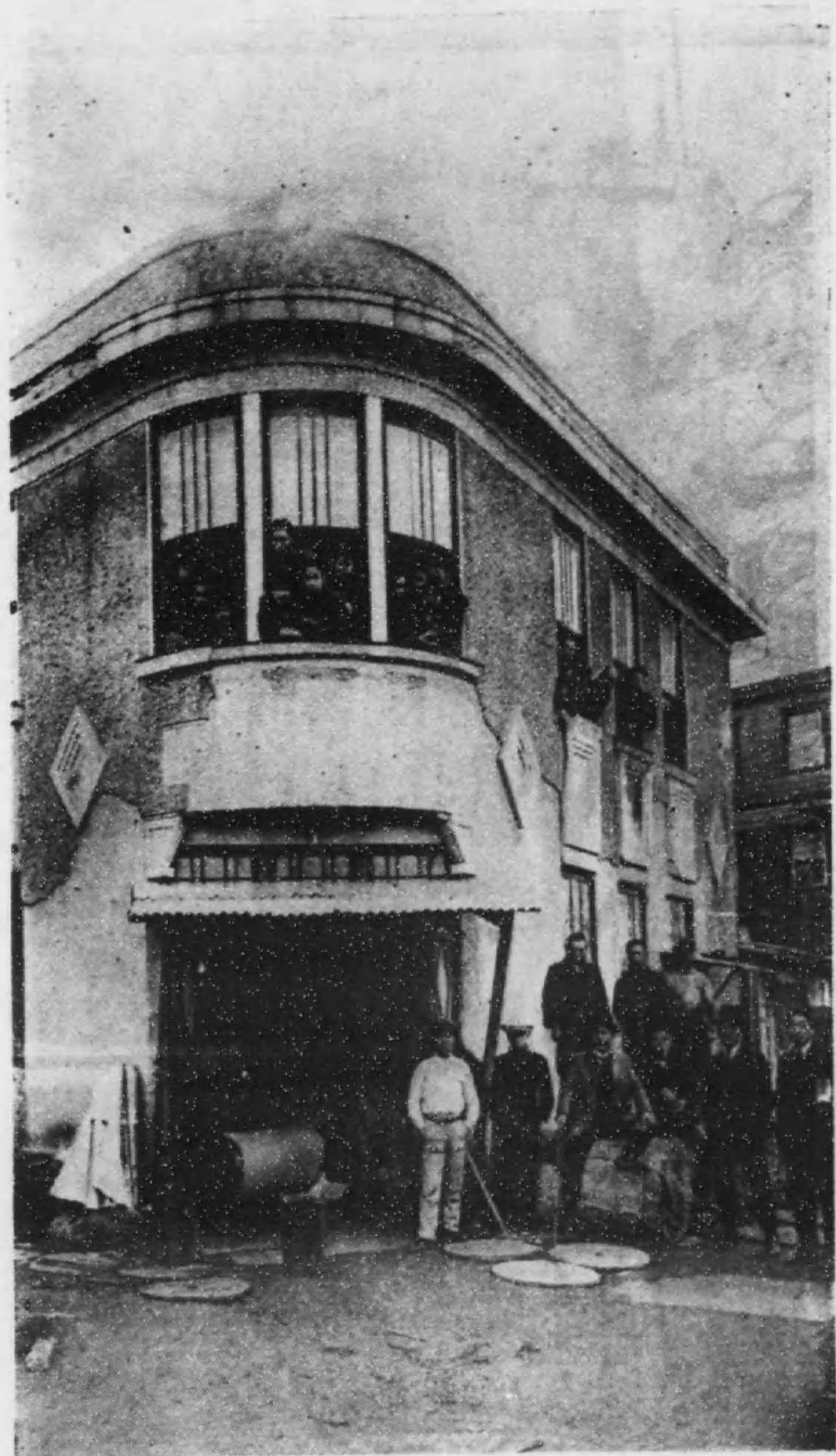
編 者 誌



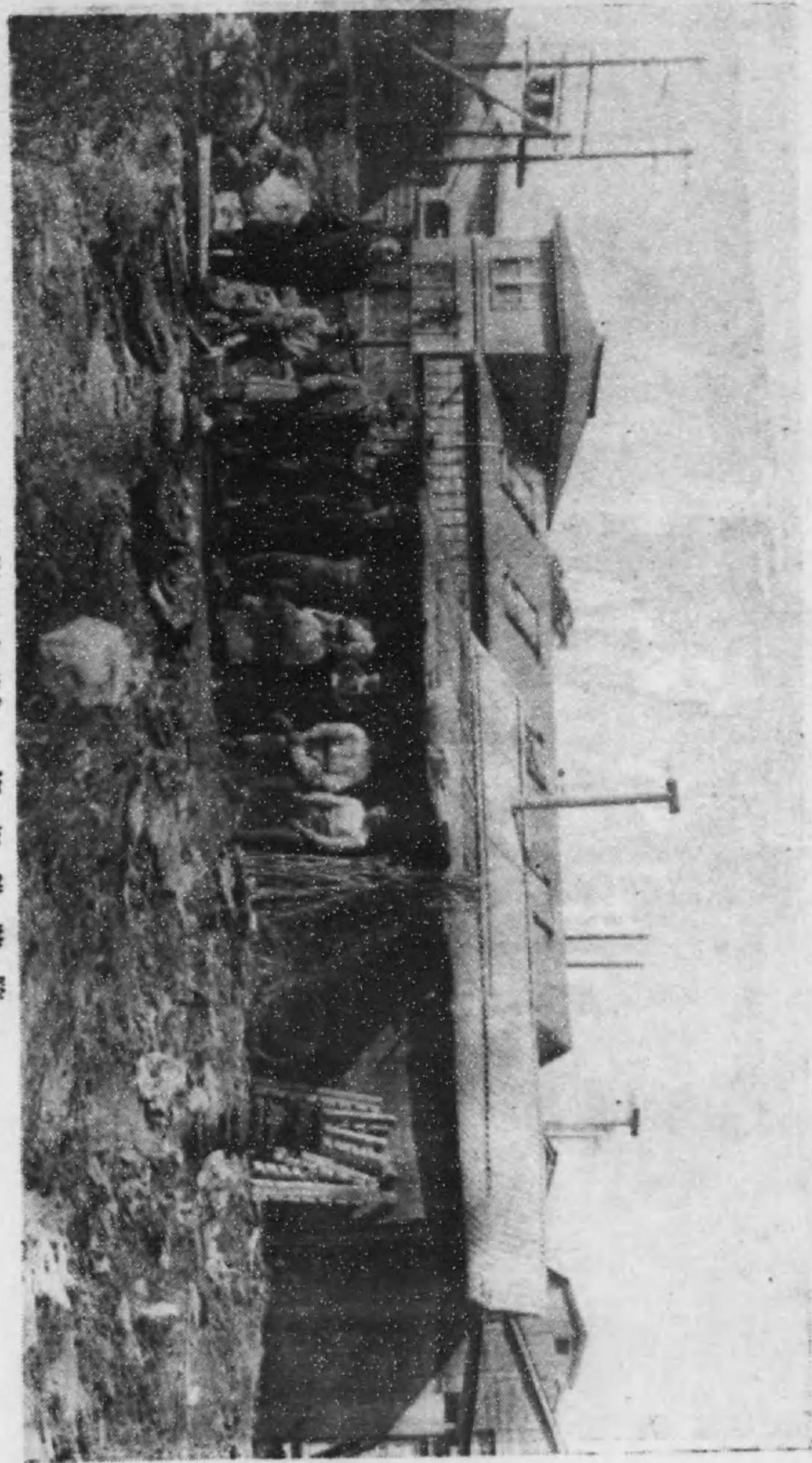


(内堀工二第ライタノモ) 堀板活時隊





臨時印刷場(モタノイブ研所)

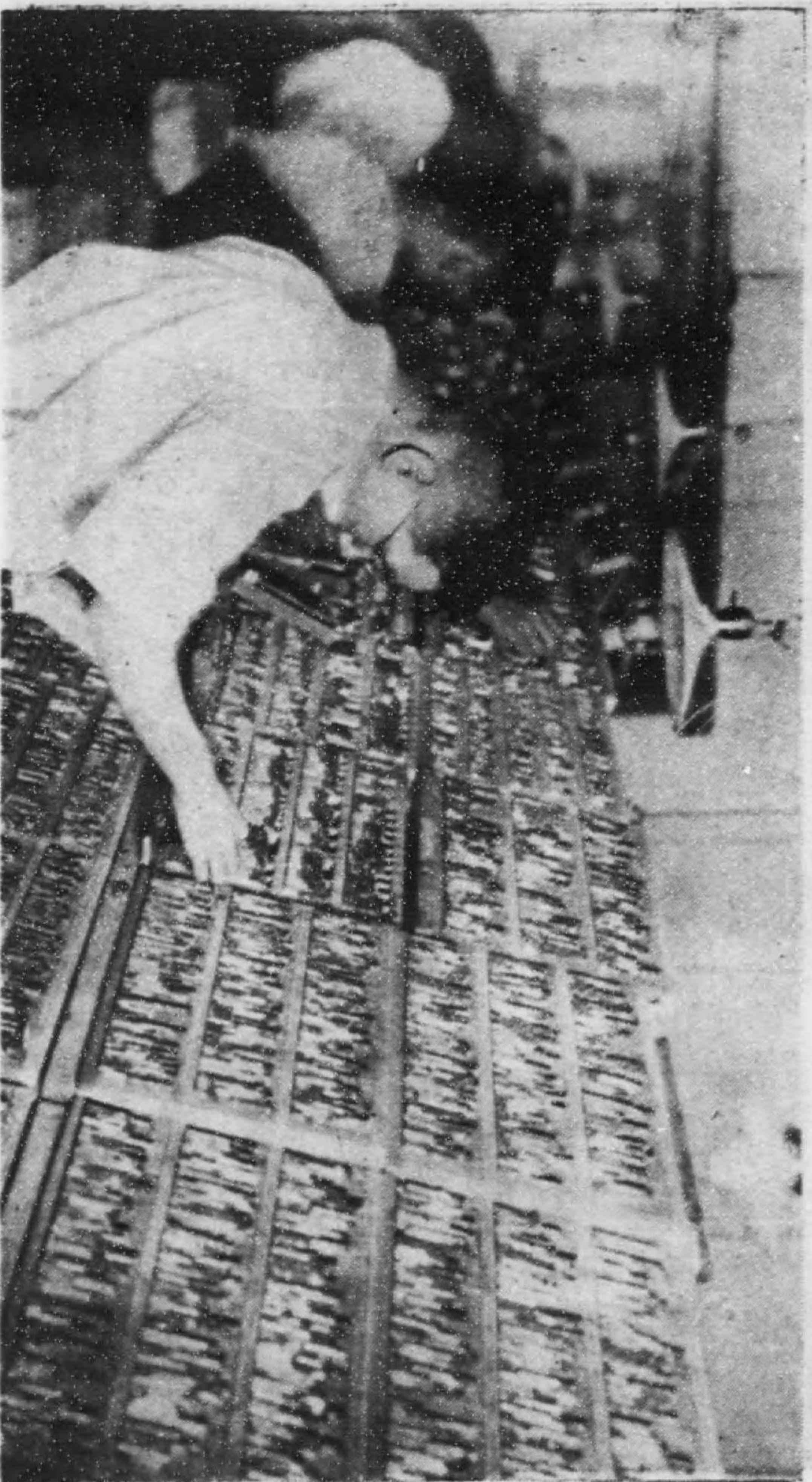


臨時踏版場(中層工場内)





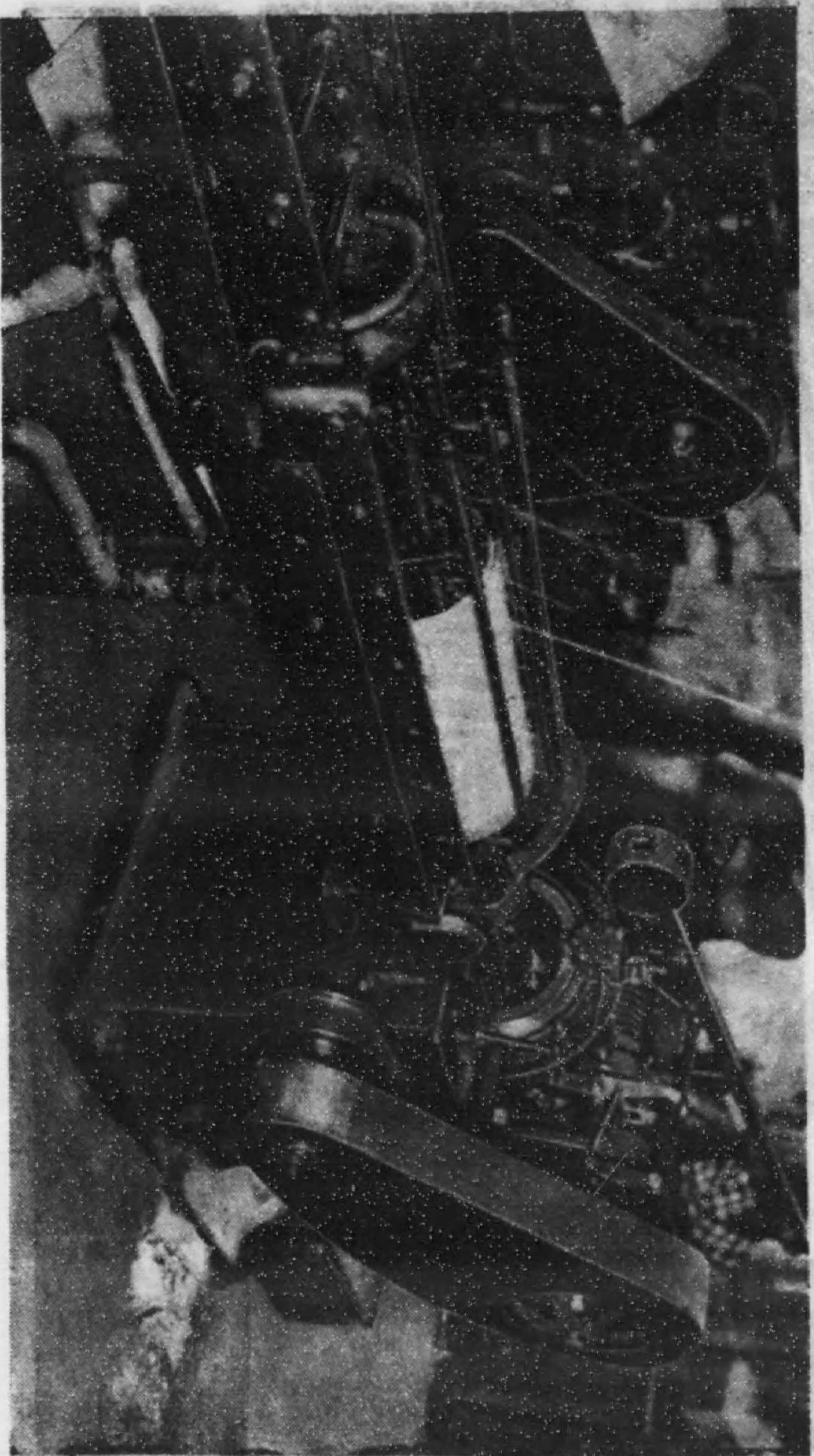
社本ノ復興



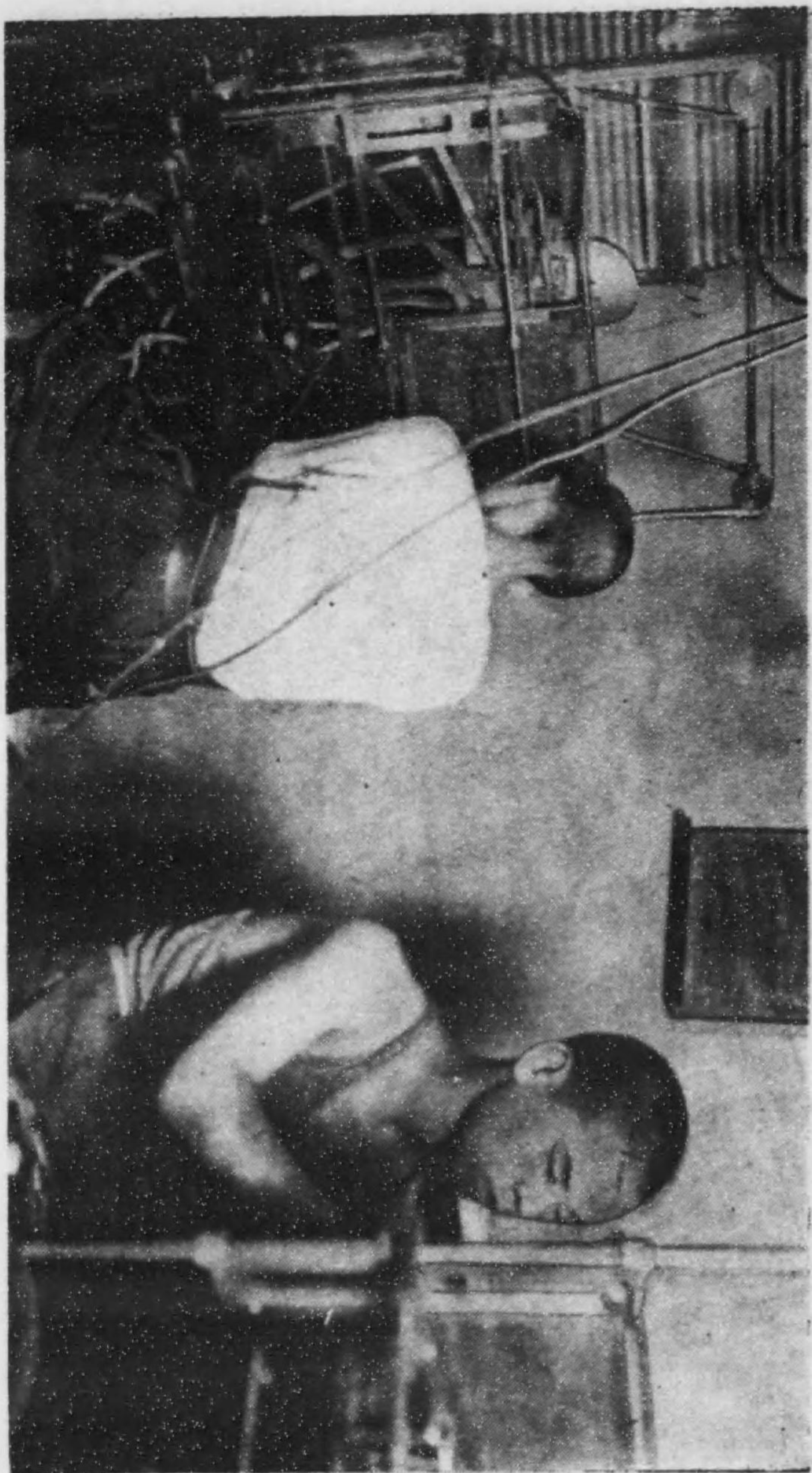
場工調文ノ復興



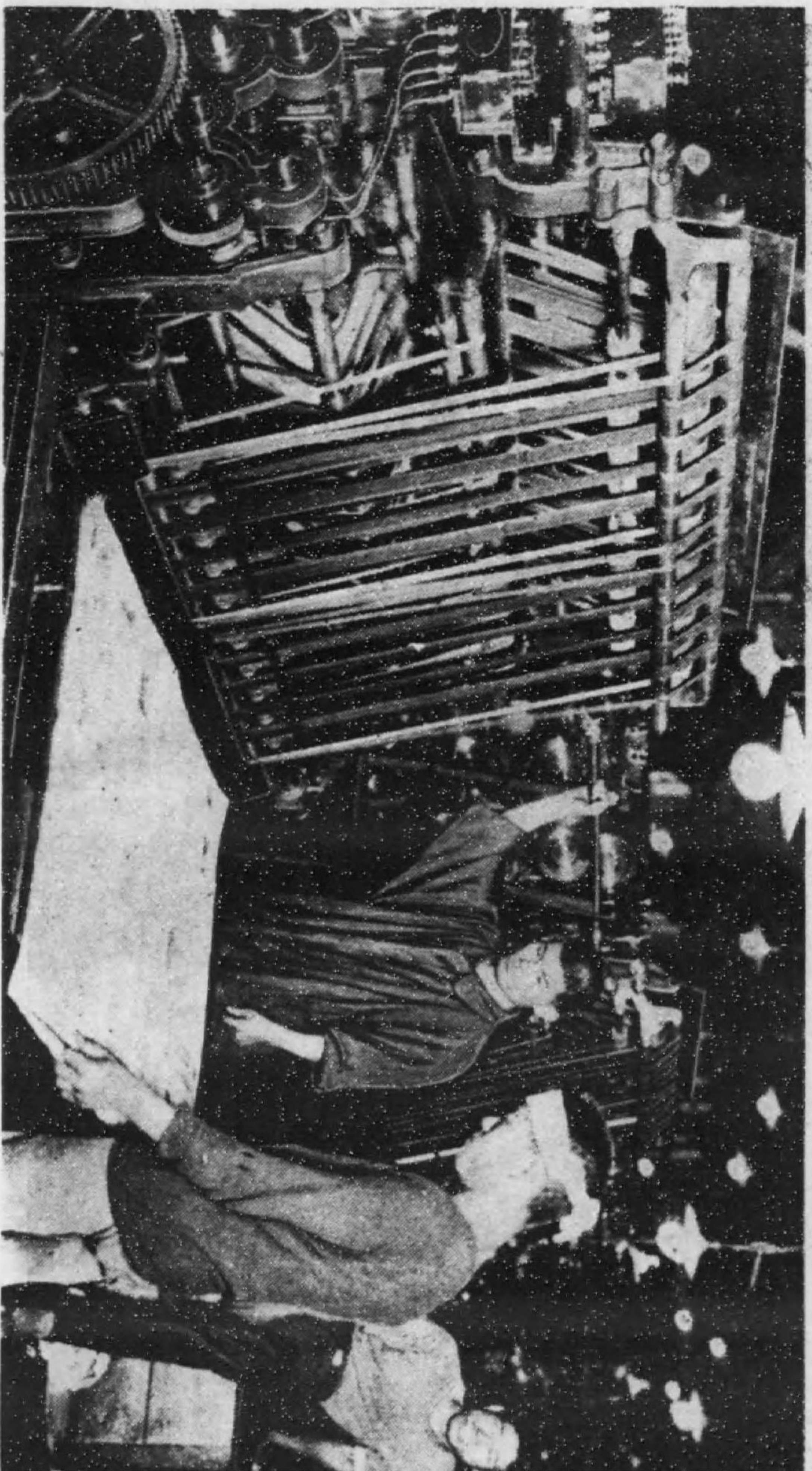
部 一 ノ 場 工 板 鉛



造 器 ノ イ タ ノ モ







復 興 後 の 刷 印 工 場



六 段 下 文 撰 工 場 御 成 ( 御 成 御 場 工 務 部 長 )



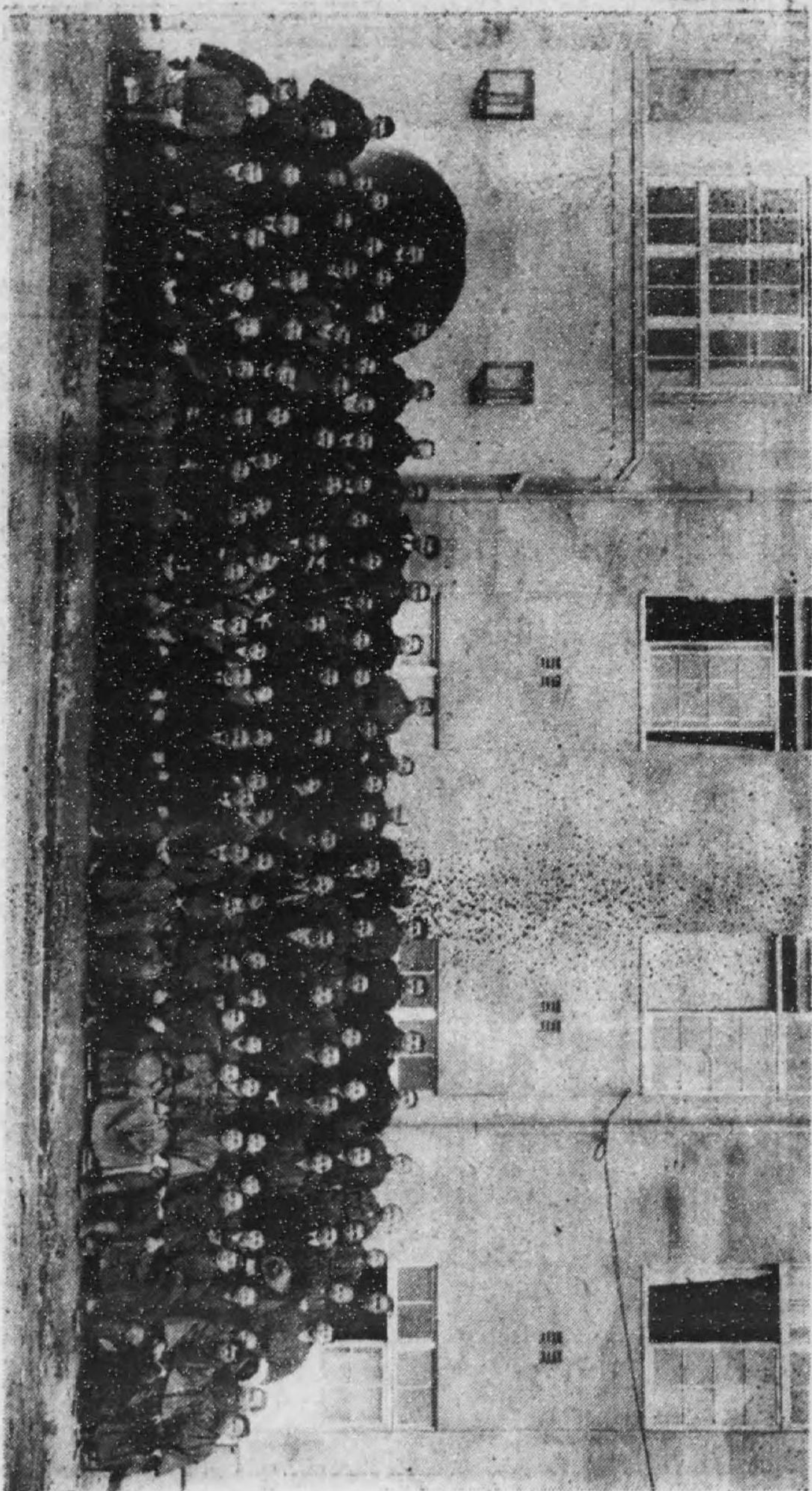


（長部務工崎自朝明脱御） 覽 兼 御 場 工 字 箱 下 殿 六



（長部務工崎自朝明脱御） 覽 巡 御 場 工 刷 印 下 殿 六





昭和十一年一月一日新聞記者

目次

一、大震當時の時事新報社

震災直下の光景	一頁	本社火に包まれる	六頁
編輯局の活躍	二	芝公園の小憩	七
工務の大努力	二	東日報知訪問	七
大震災の號外	三	機械購入に出勤	八
營業局の奔走	三	東機兩重役訪問	八
時事消防隊の活躍	四	モノタイプ會社	九
帳簿貴重品搬出	四	橋本氏の快諾	一〇
新活字の取下し	五	三度芝公園に突入	一一
猛火愈々迫る	五	出版部延焼	一二
製版機取出し	五	三田山上の一夜	一二

二、罹災直後より四頁新聞發行まで

滿目只荒涼	一三頁	社中同人續々集る	一六頁
時事新報本部の建札	一四	號外發行の用意	一七
慘憺たる本社跡	一五	總造大に悩む	一七



唯一の號外發行  
 糧食買入難  
 鮮人襲來騒ぎ  
 三田山上の假寢  
 臨時委員編成  
 號外三回發行  
 工務復興方針  
 大阪へ機械注文  
 機械職工の送迎  
 機械工場借受  
 石油發動機購入

一八頁 舊活字三十萬本  
 一八 輪轉機据付  
 一九 紙型鉛版機据付  
 一九 寫眞製版準備  
 二〇 四頁新聞發行  
 二〇 二日に亘る徹夜の印刷  
 二一 全社の活氣漲る  
 二一 販賣部の活動  
 二一 各部署の繁忙  
 二二 相互扶助の美事  
 二二 救恤と講演  
 二二頁 二三頁

### 三、四頁發行より十二頁復舊まで

本社焼跡の整理  
 假建築設計  
 大林組と建築契約  
 朝夕刊八頁計費

二九頁 三〇頁 三一頁 三二頁  
 三二頁 三三頁 三四頁  
 三二頁 三三頁 三四頁  
 三二頁 三三頁 三四頁  
 三二頁 三三頁 三四頁

新館機械据付  
 文選及製版設備  
 工務の新館移轉  
 新館にて初印刷  
 編輯及營業の移轉  
 新館の概要  
 徳々十二頁復舊

三四頁 三五頁 三六頁 三七頁 三八頁 三九頁  
 三九頁 四〇頁 四一頁 四二頁 四三頁  
 三九頁 四〇頁 四一頁 四二頁 四三頁  
 三九頁 四〇頁 四一頁 四二頁 四三頁

### 四、復興より發展の一路へ

越年後の時事新報  
 面目一新の工務部  
 印刷改善、研究所新設

四四頁 四五頁 四六頁  
 四四頁 四五頁 四六頁  
 四四頁 四五頁 四六頁  
 四四頁 四五頁 四六頁

(完)



## 大震當時の時事新報社

震災直下の光景 大正十一年九月一日突如として起つた關東の大震災は一朝にして東都三百年の文化を破壊すると共に有らゆる言論報道の機關を絶ち絶ての印刷出版の施設を覆した、我時事新報社も亦此災禍を免るゝことは出来なかつたのである。

灰色の空重苦しき正午前、新聞製作の事務は漸く多忙を加へ編輯局に於ては當日の夕刊原稿整理を急ぎ工場に於ては午前中の工程を終へて將に午憩に入らんとする頃であつた、突然異様の鳴動が傳はると思ふ間もなく大地と共に木造煉瓦二様の三階建約八百坪の社屋は非常なる激動を始めたのである、アツと思ふ瞬間其何の故たるかを知らず何人も只本能的の恐怖を感じたのこ足を踏みしめることの出来なかつたのを不審に思つた位であるが漸く「地震」と云ふ意識を生じた頃には矢張り第一の強震が襲つて來たのである、只見る屋瓦は離つて四方に墜落し窓硝子は微塵に碎け壁は落ちて土煙は室内を暗らくし箱と云はず書類と云はず顛覆散亂せるが中に更に一層の強震を加へたるは階上なる活版工場内に於ける千數百枚の活字ケースの倒覆である、約八百萬本四千貫目の活字を納めたるケースが一時に反落せる音響は屋内に轟き渡つて益々凄じさを加へる、其間に立つて多數従業員は右往左往逃げ惑ふもの、女工幼年の泣き叫ぶ聲が凄々たる土煙の裡に聞こえる亂離混雜の中に「階下へ下りては危い！二階に止まれ！周章るな！泣くな」の聲が起つた之れは熊崎工務部長の工場員制止の叫びであつた、蓋し時事新報社は大正十年九月二十八日の出火にて階上の大部分を焼失し土井屋根の應急建築に成つて居るから階上にあることの寧ろ安全なることを信じたからである、斯る中に激震は少時治つたが、更に第三震第四震と殆ど止め度がない、而も本社



の人々は一大決心の下に此大震災を戦ふべく一部分の帰宅者を除く外悉く社内に踏止まつて居た、山本重役、大西支配人、神吉營業夫長等何れも階上編輯局に來り明石編輯長、伊藤次長、能崎工務部長等と突壁の間に語を繼めて取敢ず復舊と當日の號外發行に努力することゝなつた。

### 編輯局の活躍

此日皆午前中より各受持方面に活動して居た記者連は何れも其出先に於て震災に遭遇し各々市中の被害状況を顧して歸社したから編輯局では原稿を整理し直に工場へ回付する外盛に謄寫印刷により號外を作つて附近へ貼出し又は白紙に大書して社前に掲示する等迅速なる報道に全力を盡し寫眞班又各方面に出動して實況の撮影に努めた。

### 工務の大努力

大震災により最も大なる打撃を受けたのは云ふまでもなく工場である、活字ケースは悉く顛覆し諸道具は散亂し、加ふるに電動力は停止して殆ど足も出ぬ状態であつたが是が非でも號外を發行せねばならぬ、即ち能崎工務部長は第二廠の停止と共に直に一同に命を傳へた「帰宅してはならぬ、ケースの立直しに着手せよ、一字々々活字を拾ひあけて號外を組め」と第一震後既に帰宅せるものもあつたが殘留せる山本、岡村、稻生其他忠實なる工場員は大塚工務員の指揮の下に直に其任務に就いた此日始めて工務部に入社した服部四郎君も踏止まつて何かさ力を添へる、又選員に解版鑄造の女子も加はつて甲斐々々しく活字を拾ひケースを立てる、其間にも引切りなしに激震がある、折角立てたケースは又倒れる、倒れれば起す、起せば倒れると云ふ有様、所謂賽の河原の石積みも斯やと思ふばかりである、而も勇敢なる工場員は眼目も瞬らず仕事を繼續して居る砲煙彈雨に身を曝して激震を交へて居る車隊と云ふ感がある、十數名の襍掛けの女子が左に右に立働く有様は赤十字救護隊の夫れを思はしめた。

### 大震災の號外

工場員の名狀す可らざる苦辛と非常なる奮闘必死の努力は午後二時までに漸く一の號外を組上げ得た、夫れに記載された重なるものは本所深川方面の死傷幾千に上ること、内外ビルディング倒壊と二百の壓死、淺草凌雲閣の半より折れたること、横濱の機銃等數項で都合に長文のものであつた、折角出来た組版も瓦斯は出ず動力は止まりて印刷に附する手段がない、止むなく手刷機を以て取敢ず數百枚を印刷して銀座附近を始め手近な方面へ貼出し尙引續き一枚でも多く印刷せんと努力する一方には更に第二號外の原稿を一個々々活字を探つて拾つて居るものもあればケースに活字を詰めて倒れぬ様山積にして居るものもある、一方鑄造室に於ては字母筆筒が引續返つて幾種幾萬の字母が仕上げ中の活字の間に散亂せるものを拾ひ集めて居るものもある、鉛版印刷方面のものは出勤時間前であつた爲め比較的少數であつたが各々機械の上に落掛つた壁土などを取除ける事に骨折つて居るものもあれば再度の塵土を防がん爲め覆ひをかけて居るものもある、此等誠意ある工場員の努力と勇氣を見て感激し賞讃せぬ者はなからう、當日勇敢にも最後まで踏留まつて奮闘した工場員の氏名は左の如くである。

- 井村榮一、池田清次郎、稻生益太郎、石川鹿次郎、飯嶋榮藏、西田傳吉、星野國次郎、笠原龍三、米村鐵藏、中里重松、松井勝彌、
- 松本彌三次、齋藤喜三、石村良之助、天野暢、柿崎進、岡村梅吉、山本求、木田橋彌之助、長田秀吉、藤田昇太郎、加藤はつよ、高
- 橋えい、山岸みよ、藤宮きん、遠藤たけ、佐々木しい、塚田ふく、大川義雄、勝野貞、江原隆作、淺野喜助五月女善次郎、澁谷幸太
- 郎、谷本友市、安藤常太郎、中川甲子三、石田豊吉、小高宗助、

### 營業局の奔走

一方營業局員の中にも大震の直後に帰宅したものもあるが殘留せる人々は何れも其部署に就て整理をなし或は社外に出でて種々の情報を齎すもあり廣告部員は平素の顧客先の見舞に、販賣部員は市内專賣店の安否又は地方の情勢を知るべく努力し會



計調度又各々應急善後策に腐心して居た、殊に調度の氣轉により山と盛つた糧飯を一同に配付したことは大いに元氣作興に効果があつた時は已に午後二時半を過ぎて居る、警視廳出火等の警報はあつたが未だ大火災の豫測など到底有得なかつたのである。

### 時事消防隊の活躍

斯の如く工場、編輯、營業の全員全力を盡して其機能の發揮に努めつゝある際不圖窓外を眺むれば土橋方面銀座電話交換局邊りに起つた黒煙りが頻りに勢ひを増す有様であつた、事容易ならじと見て取つた熊崎兼任消防長は大塚次長に旨を傳へて時事消防隊に防火の用意を命じた、時事消防隊は大正十二年五月熊崎工務部長が未だ調度部長在職中に其必要を認めて組織したもので、隊員三千八名之を二部に分ちて相當訓練を経たるものである、大塚次長の指揮により一同制帽を戴き防火服を纏ひ社内六ヶ所の消火栓にホースを連結し、イザ一奮闘と身構へたのも束の間忽ち断水の脅威に接したので、今は防火の用意も鈴なし速かに萬一の場合に處する避難の準備こそ大切なれと消防隊員は茲に活動方針を他に轉じたのである。

### 帳簿貴重品撤出

命令一下、忽ち新聞發送用の一噸積トラックは早くも社前にガソリンの煙音を立てゝある、小川會計部長、

鈴木販賣部長其他多數の社員雇員は消防隊員に力を協せて立働く、熊崎消防長は第一の自動車には最も大切な會計販賣廣告等の諸帳簿類並に活字の母型其他貴重品の積載を命ずる、忽ち山と積込まれたトラックは立騒ぐ街路の人波を分けて上大崎なる福澤社長の私邸へ向ふ、第二のトラックも引續き重要品を積載して後を追ふ而も上大崎までの運搬は通路に障礙物多くして往復に意外の時間を要することを知り第三以後のトラックに積載したものは芝公園なる本社出版部へ運搬せしめたのである、中には手車に積んで銀座二丁目大倉組へ持込んだのもあるが形勢危険なりと見て再び芝公園へ移すことにした、斯くて大量品を除く外有らゆる必要品は自動車の幾往返に悉く運び出

し數十個の官私電話機を始め重量ある電話交換機、其他電氣時計類に至るまで芝公園へ送り届けた、時々は已に午後四時半、八官町方面の火の手は頻りに猛威を加へつゝある。

### 新活字の取下し

手摺品は運び去つた今は重量品をも出来る限り處置せんものと新改鑄七ポイント半の活字約七百萬本を各

十五六貫目入の箱詰めにして階上に積んであるのを大塚氏の指揮の下に工場員發送係り等苦辛慘怛して一々階下に運び下したが到底之を他方面へ移送するだけの自動車がない、已むなく土床の上に積んで濡れ蓆を覆ふて置いた、業火に對しては濡れ蓆の如き全く見當に類したところであるが此場合他に良方法もなかつた印刷工場の輪轉機や鉛版諸機械の如き到底動かし得ざるものは最初からあきらめて居たがモノタイプの母型版は桶崎タイピストが煙を肩して取出し又鑄造機の鑄型なども持出した輪、轉機の周圍には當日中已に百餘本一千數百連の巻取紙が運び込れてあつたのを見たが之亦如何にも致し方がなかつた。

### 猛火愈々迫る

炎々たる猛火は已に宗十郎町を管めて電報通信社の間近くに迫つて來た、最早到底免るべくもない、今まで第二

號外を組む爲めに階上文選工場に立働いて居た工場員にも仕事を停止して避難の用意を命じた、時は已に午後五時過ぎ尙全社の殘留員は數十名を算した、夕陽は既に落ちて黄緑の光を投げて居る、今までは只騒がしく重苦しく感じた空に俄に風の強くなつたのを覺えた、最初は西北に吹いて居たのが俄に東南に變つたと思ふ間もなく頻りに風力を加へて天に漲る黒煙は朝日新聞社より交詢社方面へ流れ帷大の火の粉は空を舞ふて本社の屋上に降り掛り早くも火炎は龍山町一帶より南鍋町を包まんとして居る。

### 製版機取出しの奮闘

今はせめてもの防衛に全社屋の窓戸を閉すべく命じた後熊崎氏は自ら三階へ上り圖書室及社員宿直



影の窓を破りて降りて来た、果敢最も奥まった三階の寫眞館の諸機取出しを失念したことが櫻井製版主任によりて發見された、同君は氣を焦つて之を如何にすべきかを語る、熊崎部長は即座にまだ餘裕あり直に之を取出すべく命じた、折しも強風一襲猛火は忽ち交詢社を背め見る間に我寫眞館の一角に紅舌を延ばしたのである、而も大塚製版櫻井松尾等の猛者連は少しも怯む色なく引續く震動と熱氣身を焦すが如き三階へ馳せ上り手に手に引伸機を始め寫眞館の諸機器を提げ渦巻く黒煙の間を滑つて戶外へ飛び出して来た。

**本社火に包まる**

此時早く炎は已に本社三階より二階の大半を包み烈風一襲、隣接せる晝夜銀行を一飛に銀座街頭へ燃移つた、附近の街路に持出された誰の所有とも知れぬ諸荷物も悉く火になつて居る、逃げ惑ふ人々の衣袂にも紅の炎が見える、帽といはず服といはず降りかゝる火粉に羅紗の毛の焼ける臭がある、熱氣を焼いて危険眼前に迫つて来た、最早寸刻の遲疑を許さぬ「全員芝公園へ退去せよ」と大膽に怒鳴つたが風と煙りに遮ぎられて全部には徹底しなかつたかもしれぬ、左らば思ひ出多き時事新報社よ火に包まれし隣まじき我社よイザ永遠に訣別せん、汝の姿は業火に消ゆることも獨立自尊の精神は却久に動かさず、之れを最後の手向ぞさばかり正門の鏡戸を叩し後見返りつゝ渦巻く煙りを突いて銀座通りへ出た、街頭は混亂甚だしく通行極はめて困難で、本社の人々も何時か相散離して其数を減らすことが出来ない、神吉次長、大塚杉山氏等の姿も見えなくなつた、若しまだ危険地帯に残留せるものなきかを憂ひて熊崎部長は單身再び社前に突進し煙りの中を透し見て人影なきを確かめた後熱火を煽る烈風に追はれながら一散走りに新橋まで落ち、此處にて最後の荷物を積めるトラックが混雑の爲め前進を妨げられて居るのに追付き之に便乗して芝公園なる本社出版部へ向つた、集立つ心にもどかしく鈍き思ひのトラック車上熊崎部長の頭腦の中は早くも復興と明日の號外を如何にして發行すべきかの問題が旋風の如く渦巻いて居たのである。

**芝公園の小憩**

凄氣雑々に増せど西久保町なる本社出版部は當夜七八時頃までは安全地帯であつた、本社より運搬した諸荷物は塵埃きまでに積込まれてある、本社の最後を見届けて此處まで引揚けたものは大西局長、熊崎部長、山村製版部石田松尾見白崎の諸氏及び後れて到着した神吉次長、小川會計部長其他工場員發送員等總計二十餘名に過ぎなかつた、數時間の奮闘に疲勞を覺へた一行は附近の寺院からアンペラを借用して路上に敷き冷水に髪を濕して暫しの小憩を取つた、此の間出版部では製版の用意をする、夫れを待つ暇もなく再び活動の機會は到來したのである。

**東日報知訪問**

暖夏の日は已に落ちて時は正に夜の八九時頃ならんか暗黒の帳に包まれた芝公園の樹間から遙に東南を見渡せば一丈赤黒く輝やきて滿都の火の海は物凄く眼前に展開されて居る、何方を何處と見定めは出来ぬが恐らくは京橋銀座の一帶も正に熱火に埋られて居るであらう、赤坂田町方面の火の手も殊々勢ひを増しつゝある、此凄愴の光景を前にして悠々休息して居る譯には行かない一刻も早く善後策を講ずる必要がある、即ち大西、神吉、熊崎の三氏は忽ちトラック上の人となつて大火の光景を視察して後圖をなすべく出動した、混雑せる道を迂回して先づ日比谷に出で燃盛れる警視廳の前より遙に時事新報社裏りに立昇る猛火を眺め萬解の思ひを胸に懷きつゝ、傷廢の姿も傷ましき帝廳の横に出で幸運にも火災を免れ得た東京日々新聞社を訪ひ折柄居合せた久保田工務部長に視察を申述べ次で報知新聞社を訪れ太田副社長に面會してお祝ひを申上げ再びトラックに打乗り歸路日比谷の娼婦にて歸らずも門野重役に行遭ひ更に本社退却の際に於て見失ひし大塚杉山兩君と機會し共に芝公園へ引返したが此時已に田町方面の火の手は瀧池通りを貫めて葵町から築石町邊へ迫つて居



る今少し後ればれば道路を遮断されんず有様であつた。

### 機械購入に出動

道を迂回又迂回して漸く芝公園出版部へ歸着した頃には焚出しの掘飯は已に盡きて居た、黙々として何事か期する處あるやに見へた熊崎工務部長は寸時休息する暇もなく大塚氏を促して又も出動すべく再びトラック上の人となつた、蓋し社屋を始め一切の機械器具を烏有に歸した本社の事業復興の爲め、一つは當面の急務として明日直に號外を發行すべき準備の爲め先づ三田四國町なる東京機械製作所を訪ふて必需機器を購入、又は注文せんが爲めであつた、満都の大部分が火の海と化し三田方面の運命も素より豫測することは出来ない、加ふるに人心阿々混亂騒然の折柄早くも復興の一路に進せんとしたのは特異の事實と云ふべきである出動の際熊崎氏は小川兼任調度部長の同行を求めた、空は焦けて道隘く障多き街衢の人垣を縫ふて漸く東京機械會社へ到着し表口より案内を乞ふこと再三に及んだが森園として何の答へもない試みに扉を叩けば音なく開けたので何人か番人が居るだらうと思ひ更に幾回か呼んで見たが只屋内にコダマの響くのみである、無斷侵入で押入まぬと思つたが止むを得ず持合せの鑰匙を擦つて開き事務室に入り電話帳を探がし出して同社の重役森川要之輔、青木萬吉兩氏の住所を見付出して其私邸を訪問することとした。

### 東機兩重役訪問

青木氏宅は近くの三田功運町である直に訪問して後庭にて面會し同社に現在せる輪轉機踏版機其他附屬品全部の購買を申込んだ所青木氏も餘り唐突のことにて聊か遲疑された様であつたが「森川専務さへ御承知ならば私に異議はない」このこと自然らばさばかり青木氏に念に念を押した上更に麻布本村町の森川氏を訪問した、折柄森川氏は順天堂病院に入院中の夫人の安否を氣遣つて居られた場合であつたが青木氏と云ひ森川氏と云ひ何れも熊崎氏は豫て懇親の間柄でもあり已に青木氏は承諾せられたことであるから森川

氏も此非常の購買申込を即座に快く承諾せられ茲に熊崎部長が計畫した差當り必要の印刷機械の用意は頗る順調に整備したのである、當夜買約並に新規注文をした重なるものは大體次の諸品である。

一、マリニー式輪轉機三台(内一台現在品) 同附屬品一式 一、モーター(五馬力)三台(現在品) 一本紙鑄型一台(同)

一、ステロ登一個(同) 一、鋸口切一台(同) 一、三連式コッピプレス二台(同) 一、ルラ鑄型二組(同)

一、裏押機一台(同) 一、自動製版機二台及附屬品一式 一、其他必要諸機器數種

### モノタイプ會社

夜は未だ深更にも至らぬに早くも印刷諸機械は整ふた、此上は活版の準備であるが全市の活版業者中假令大火を免れたにしても恐らくケースの顛覆せざるものはあるまい、果して然らば應急の方策としては邦文モノタイプを利用するが最も捷徑であらうとは熊崎工務部長が自問自答した所である、直様トラックを三田豐岡町の日本タイプライター會社へ向はしむべく命ぜられたが晝間よりの奔命に疲れた自動車は仙臺坂の中腹で一時停車の悲境に陥つたのである、百方努力修理の結果漸く進行を始めて豐岡町タイプライター會社へ到着したが只一人留守番が居るのみで要路の人は不在である、仍て留守番君に尋ねて同社の常務取締役林正胤氏の住居が麻布霞町邊であることを知り再び疲れたトラックを獲つことになつた、顧みる北東南の方向炎々空を焦して天地悉く業火に満つるの有様であるが眼を落す足許には一個の街燈もなく人家に漏るゝ燈光もない、霞町通りの隘路は頗る暗くて崩れた石垣に塞がれ倒れた煉瓦壁に遮られて通行甚だ難澁である、逆も自動車では進めないから中途車を降りて徒歩し漸く林氏宅を尋ね當た、林氏亦熊崎氏の知人である、早速來意を告げて同社現在のモノタイプ全部の譲渡をお願ひしたが相償販賣用の製品は一台もなく只タイプスト教習用として九ポイント及び七半のものが



數台あるのみとのことであつた、それでもよいから七ポイント半の分全部と四號一二台の分譲を乞ふた所が社長の意見を聞かなければ何とも答へられぬとのこと、御尤ももの次第と思ひ林氏からの紹介名刺を買ひ早速芝二本樓西町なる同社長橋本喜造氏を訪問することにした、同行の小川氏は之より先一行と別れて歸宅し残るは只熊崎大塚の二氏のみである、晝間より録々飲食もせず十餘時間に亘る非常なる奔勞激動に身體は疲れ脚部は痛みを覺たが斯様なことで怯んではならないと益々勇氣を振るひ起した兩氏は動搖甚だしきトラツクに跨つて二本樓へと馳出した。

橋本氏の快諾

夢心地に到着した二本樓西町の宏壯なる橋本氏邸も亦震災の爲に甚だしく破損して居るのが觸氣に見へる、門を落つて隣き邸内に入り女隠に立つて案内を乞ふたが更に答へがない、幾度か其邊を廻りて頻りに呼んで見ても森閑として應へなく庭園に響くコダマの響きが寧ろ物凄きばかりである、若しや家族の人々は二本樓通りへ出られたのではあるまいかと通りへ出て邊りの人に尋ねたが更にわからぬ、再び邸内へ取つて返し庭の植込の邊りを彼方此方と探り歩く中不圖目に付いたのは一台の大型自動車が出の中にも音もなく停つて居ることである。勿論人影もなく火の光も見へぬが若しやと思ひ車外より「橋本サーン」と大呼した處意外にも中より「何誰？」と答へがあつた、底力ある其音調は確に橋本氏に相違ないと思ひ直様來意を告げ林常務の言葉を傳へて切に快諾を求めた處暫し黙然として居た橋本氏は頗る感嘆の聲を發て此非常の場合人々途方に暮れ徒らに騒ぎ狼狽へて居る架夜に早くも新聞の使命を完了すべく復興計畫を樹て危険を顧みず疲勞を感はず遠路をわざわざ來訪せられたことは何れも敬服の至りである、自分は只感激の餘り貴社の必要品を全部提供することを茲に快諾する、何なりと役立つものは自由に使用されて差支へない、このことであつた苦心奔走の甲斐あつて漸く目的を達した二氏は

橋本氏の好意ある言葉に益々望蜀の念を起して卒ながら日本タイプライター會社第二工場構内を時事新報假工場として使用することの御承諾を乞ふて之亦快諾を得た、即ち當夜日本タイプライター會社より譲り受けた機械は左の如くである

- 一、邦文モノタイプ（七半ルビ付）三台
- 一、同（七半九字）一台
- 一、同自動機（同）一台
- 一、同（四號）一台
- 一、外必要諸器具、既成活字及ケース等

三度芝公園に突入

既に活版並に印刷機の用意は出来た假工場設置の箇所も確定した、二氏は稍々安堵の思ひをなしつつ、橋本氏は明朝の再會を約して同邸を引揚けた、豪快なる橋本氏の好意ある言葉は尙耳朶に残つて居る、此非常の場合に自動車を避難場所とした氏の奇智、又其自動車が一代の偉人大隈侯の乗用車を橋本氏が譲り受けたものなることなど考へつゝ何時しか二本樓通りへ出て不圖彼方芝公園の方面を眺むれば炎々たる紅蓮の中に五重の塔の影を映し天空に舞ふ火粉は流星の如く八方に散つて見へる、恐らくは公園の過半は已に猛火に包まれたのだらう、果して然らば我社の出版部も同所に運び込んだ諸物品も氣遣はしい否な同公園内に避難した我社同人の安否も心許ない、左らば救援の爲め萬難を擧して危地に臨めさばかり熊崎大塚兩氏は三度芝公園に突進したが避難の群衆と荷物とに遮ぎられて進むことが出来ない、迂回して曹松寺と増上寺の間協調會館邊まで来た頃トラツクは何時の間にか重圍の中に陥つて二進も三進も動きが取れない、火は愈々接近して帽大の火粉は盛に降りかゝる、頭上高く雙ゆる松ヶ枝は風に煽られた火先にバサ／＼と燃え始める危険は刻々に迫つて来た、慈惠病院の入院患者は車きは擔架に乗せられ、軀きは人肩に組つて睡も露はの看護婦に助けられなどして溜々逃げて来る、益々トラツクの進行には都合が悪い、怒るもの罵るもの泣くもの叫ぶもの、凄慘なる光景裡に千辛萬苦の結果漸く一方の血路を開いて



芝園方面へ遊戻りしホツと一息吐く間もなく此處に自動車に乗捨て、赤穂方面より徒歩群衆を押分けて榮町へ出で給水所近くへ上つた時、隣らずも能崎大塚二氏は大西局長に遭遇することが出来たのである。

**出版部延焼** 之より先き芝園方面なる本社出版部では業火の類々近づくと見るや避難準備を取急ぎ森部長、武田其他の諸氏は十餘名の本社警備員と力を合せ荷物をトラツクに満載して遠く目黒方面へ運び一坊本社の持出品は一部を上大崎の社長宅へ他の一部は給水所へ運んで難を避けたが間もなく紅蓮の煙は勢ひ凄じく出版部の屋舎を包んでしまつたのである。此時大西局長と隣らずも給水所に出會つた能崎大塚の兩氏は再び來合せた小川會計部長、石田調度部長も廻り合ひ茲に五氏相談つて一昨上大崎福澤社長邸へ引揚ぐることにし、困憊の身を轟に芝園橋邊に乗り捨てた自動車に託すべく足を運んだのである。隣に残る人や誰れ、混雜の場合相違ふことは出来なかつたが當夜公園内に本社の荷物を守つて物凄き夜を明かしたものは販賣部の山村、中村、工務部の服部、調度部の稲見等數氏に過ぎなかつた。

**三田山上の一夜** 騒がしく暗き夜の街を芝園橋邊に自動車を求めた大西局長以下五氏は行けども探がせども有るべき答のトラツクは見當らない餘りの物凄さに運轉手は遠く品川邊へ逃げ去つたことは翌日に至つてわかつたことである。已むなく五氏は車き足を踏しめて藤原ッ原邊まで來た所大西局長の疲勞其極に達したと見へ街路に捨てられし空電車に入つて暫く身を横たへざるを得なくなつた。此模様では到底上大崎までは費東なし如何はせんと思ひ惑ふ中にも、金杉邊まで燃て來た火は此邊りまでも盛に火の粉を吹き送つて危険の接近は電車内の安息を許さない、睡ち上大崎までもなく三田山上の慶應義塾こそ本社復興の策源地として最適當ならん一先づ此處へ引揚げて形勢を觀察せんと相談一決し大西氏を促して同所へ逃り付いた、時は正に深夜の三時頃である、同山上へ上つて見れば幾萬の避難民で廣場も埋ま

るばかり混雜して居たが其中を分けて先づ福澤邸を訪ふて無事を祝し恰も來邸中の小山完吾氏の斡旋により屋内は危険なればとて門前を敷き暫し此處に休息することとなつた、同家の好意に依る冷水とシトロンの接待は大興の甘露で喉の幾分を凌ぐことは出來た、五氏共に疲勞は極點に達して居るが滿都の火雲を眺めては眠ることは勿論庭の上に落付いて座つて居ることも出來ない、一三分時を待たずして代る々々山の端に立出で、凄慘たる大火の光景を眺めて居る、遠き彼方は只一面の火の海のみにて何の見境ひもないが近き松町金杉邊りの猛火は見る々々中に次から次へと大廈高樓を紅蓮の舌に巻き込めて行く其有様の物凄さ、何とも形容の仕方がない、加ふるに大地の震動は晝間より引續いて殆ど絶へ間なき状態である吹く風は異様の臭氣を齎し四邊の喧嘩は百千の惡鬼が呻く様で實に世界の終りも斯やと思ふばかりであつた、殊に東南の風は火勢を煽つて遂に三田方面までも及ばしむるやも知れない有様で其心痛は一通りでなかつた、兎角する中に東方次第に白み渡つて人類史上未だ嘗てなき慘劇の夜は將に明けんとしつゝあるのである、大火は稍々衰へたるが如く又衰へざるが如く中々安心すべき形勢には至らない、燒落ちた我社の状態や如何に、否々混雜の場合互に離散せる社中同人の安否や如何に、之れで第一の懸念であつた。

## 震災直後より四頁發行まで

**萬目唯荒涼** 震災直後行きて九月二日の朝曉は煙の中より輝き初めた、滿目荒涼たる現象は薄雲の裡より刻々に吾等の眼前に展開されたのである、一帯の焦土、見渡す限りの荒原は只黙しもなき如くに三田山上より眺められた、イザヤ本社被害の跡を見届け離散せる人



を叫合して速かに復興の一路に進まん、印刷上の諸般準備及び假工場の場所は前夜中に已に調つて居る、此上は本社假編輯及營業の位置を定め一類も早く號外を發行して新聞の使命を果すべきである、即ち小山氏の斡旋を煩はして慶應義塾講堂の一部を借用して事務所を置くこととし、職澤家より筆硯を得て有り合ふ古新聞紙二枚に「時事新報本部」と大書し一は講堂に一は熱門に貼付し、庶務部を定めて業後の行動に入つたのである、即ち大西局長は假本部に止まり、小川會計部長は應急の金策の爲め、石田調度部長は芝公園に運搬せる荷物處理の爲め、能崎工務部長及大塚工務員は社員及工場員叫合の爲め本社焼跡に建札をなすと同時に被害程度調査の爲め、慶應義塾を後に各々活動の途上に立つた、勿論前日未だ一食をとらざるものもあれど天の暴虐に抗せんとする五氏の意氣や頗る壯である。

時事新報本部の建札

前日未だ二十餘時間に亘る徹夜の奮闘に雖も頭も身も服も汗まみれと汚れて殆ど別人の如く見ゆる能崎、小川、大塚、石田の四氏は暫し大西局長に別れを告げ二日午前六時熱門の坂を下つて三田通りへ出た、折しも札ノ辻方面より疾走し來る一台のトラック、見れば「時事新報」のマーク鮮やかだ、之ぞ天の與へと喜んで呼止め事情を聞けば、此トラックこそ前夜芝公園橋邊で行衛を晦ましたもので眼前に見ゆる焦熱地獄の光景、餘りの恐ろしさに品川停車場邊まで落延びて一夜を明かし二日朝本社の様子を見届けんと今しも此處へ通り掛つたのだと云ふ、早速飛び乗つて前夜の退却線たる芝公園給水所脇へ達した、途中八百屋の店頭に西瓜とバナ、を見付けて僅に退き餓さを凌いだのは眞に天來の美味と稱すべきであつた、之より小川氏は光吉會計員を誘ふべく神谷町方面へ向ひ、石田君は山村服部君見中村等公園殘留員と力を合せて荷物の搬置に従事し、能崎大塚二氏は再びトラックを促して本社焼跡に向つた、トラック上には幅一尺長さ三尺餘の厚板に慶應義塾やかに「時事新報本部は慶應義塾」と大書されたものが目立つ、之ぞ前日取出した壁掛電話機の取付板が共

に公園内へ運ばれてあつたのを焼跡の建札には訊らへ向きの必需品とばかり大塚君が自働車にて筆を揮つたものである。

慘憺たる本社跡

荒れ果てたる町筋、トラックの進む焼跡の道路は頗る危険である瓦石煉瓦の斷片道を埋め、硝子鐵屑は路上に散置し、加ふるに架空の電線は切斷又は弛垂して頭をかすめ、墮れたる石垣倒れたる樹木進路を塞ぎて疾走意の如くでない、而も到る處尙炎々たる煙を發して到底順路を突破することは出来ない、已むなく飯倉より六本木を經赤坂へ出で大辻回して漸く日比谷より山下町へ着いたが之より先は蜘蛛の巣を穿した様に縦横に路上に垂懸せる電線の爲め連も本社跡まで自働車を進めることは不可能である、即ち建札を抱へ徒歩して恰も地雷を避け鐵條網を渡る如き様子をして加賀町邊へ來た時前夜難町三年町の自邸に在つて三方より火攻めに逢ひ漸く無事なるを得た、明石編輯長が本社慘害の跡を叩き叩き來られたのに出會した、互に言外無量の挨拶を交はした後本社跡へ來て見れば慘又慘、左しも多年の歴史を誇つた三階建社屋も僅に四邊の煉瓦壁を残したのみで哀れ一丘の焦土と化し去つて居る、此處を正門と覺しき處まで來て内部を窺がへば堆き灰燼に墜る烈々たる熱火は諸機械の鐵質を赫爛して中へは一步も踏込む譯には行かぬ、日本最初の高速輪轉機として明治二十九年以來我新聞界の誇りとなつて居た倫敦アールホール會社特製に係る一時間新聞四頁物九萬六千枚の能率を有する二台の大輪轉機も無慘や亂離骨灰の有様で恰の如く曲つた鐵骨、赤錆の輪軸が無限の恨みを呑める如く熱灰の中に見ゆる、其他九台のマリノニー式も新設のTKS折疊輪轉機も二台の自働製版機も乃至は斷裁機、鑄造機等有らゆる機器は何れも見る影もなき有様なるに加へて前日非常なる大骨折にて階下に持歸した新鑄活字は悉く溶解し去つて通路へまで銀河の如く鉛が流れ出て居る、右手の熱灰に半げ埋もれて見ゆる金庫の姿も胸の哀れを感じしめる、階上にあつたモノタイプの如きは何處へ墜落したのか影も形も見えぬ、兩氏は暫し言葉もなく無量の感慨に打た



れたが今は一類も哀愁に沈んで居る場合でないを心算して携へ来た建札を社前街路樹の枝も葉も燃落ちて只幹のみを残せる其中程に拾つた釘、缺けたる煉瓦も何人にも見へる様釘付にしてイザ引揚げやうとする折しも三四の社中同人が何れも悄然として來合せたのに會した、共に千萬無量の思ひを懐いて本社跡を弔ふた後、先刻來附近に待つて居た明石編輯長等と相携へてトラククに打乗り途中にて小川編輯長も會して假本部たる慶應義塾へ引返したのである。

**社中同人續々集る** 社員職員と云はず社の運命を氣遣へるものは期せずして焼跡を訪ふた「時事新報本部は慶應義塾」の木札は憤沈せる各員に一種の力強さを感じしめた、我社本部は三田山上にありこの次第に關係者間に傳へられる、類一類慶應義塾に於ける本社の假事務所へは續々として社員職員が集まつて來る、互に凄惨たりし前夜の光景や身を以て免れし悲壯の情景などが話題に上る、此間臨時工務部長は明石編輯長に前夜既に準備を整へたる旨を語り共に相携へて日本タイプライター會社へ赴き橋本社長、櫻井、林兩事務に面會し承諾を得て置いた假工場設置の事、モノタイプ六臺の譲與を受くると等を具體的に打合せて茲に遂々當日の號外を發行する方針を立てた明石氏は本部へ立歸り能崎氏は更に東京機械製作所へ赴き同社重役に面會して前夜の約束を更に確定的ならしめた、勿論契約は口頭である文書ではない、能崎氏は森川、青木兩氏に對し一人に信がなければ、條約は一片の反古に等しと云つたカイセルの如くである、併し吾々は互に勇である、紳士の道を履まねばならぬ、男子の一諾は山よりも重く士人の約束は鐵よりも堅くなければならぬ、故に信の一字に重きを置いて故らに文書契約をせぬが互の約束は文書を超越せる確實さを有するものなることを記憶されたいと申述べ兩氏は快心の笑を以て之を承諾せられた、如何に美しくして強く而して動かざる男性的契約であつたかどわかる、斯くて能崎氏は本部へ引揚げた後多量なる諸君の準備に取掛つたのである。

の準備に取掛つたのである。

### 號外發行の用意

號外發行可能の程は家中に彷徨る姪各員をして太く驚異せしめた、實に奇蹟を見る思ひを懐いたのも無理はない、午前十時半小川編輯長は先づ記事の整理に着手する、工務部の荒井、服部、山戸及び稻垣の諸氏は能崎氏指揮の下に必要諸器具の調達に奔走する、「時事新報」の題字は古新聞の文字を見本として三田通りの木版屋に無理矢理に頼んで彫刻して貰ふ、筆墨を買ひに出るもあれば號外用のザラ紙を探し廻るもあり或は手刷機械を求めんと飛び歩くもある、其大多忙の裡に能崎大塚二氏は既に募集せる數十名を率ひ最も大切な活字鑄造と號外組版の工夫に取掛り、小林鑄造係長に命じてカスチング購求に奔走せしめ、幸ひに四臺の買込が出来、他の方日本タイプライター會社では加藤技師長、川端第二工場長以下多數の人々が應援してモノタイプ運轉の方法を講じつゝある。

### 鑄造大に悩む

瓦斯なく電力なく水道なし、此間に於て機械を運轉することの困難は申す迄もない、如何に精巧なるモノタイプの發明も斯る場合を夢想されては居ない、第一地金を溶かすことすら不可能である、苦心慘愴の結果漸くアゼチリン瓦斯を用ひて鉛を溶かし一人のタイピストが把手を握つて機械を運轉し他の一人が母液の調子を合せて鑄造するといふ有様である、實に勞多くして功少からず正午頃より原稿を打ち始め午後二時頃に至つて尚餘まりが付かない、幸ひ多少既成活字が順覆した儘同工場内にあるを拾ひ集めて兩者相俟つて漸く三時頃までに半頁大の號外を組上げた、而も植字に用ふるビンセット一挺すら持合せもなく又買ふことすら出来ないから、突嗟の思案に三田から豊岡町一帯の醫家を片ツ端から尋ね歩いて醫服用ビンセットを一挺二挺づつ、購つて貰ひ漸く用を凝した、此一事を以てしても如何に困難の大なりしかとわかると思ふ。



**唯一の號外發行** 斯く苦心の結果は漸く現はれて組版も出来れば題字の木版も出来る、手刷機も二臺まで整つたので慥く號外印刷に着手した、大正十二年九月二日(日曜日)時事新報一萬四千四百二十三號と記せる半頁大の外號が一枚又二枚と、肉色も鮮やかに刷出されて前日來の大慘狀がまさしく目に讀まれる、餘紙、餘き文字、一枚たりとも無駄にしてはならぬとの觀念は誰にも浮かぶ、印刷の排取るに當つて三百枚五百枚と本部へ運ばれる、勿論一紙に配付するだけの生産力がないから入方へ人を派して或は電柱に或は扉や壁に其他到る處に貼付して多數の眼に觸れしむる様に努めた、此號外は誤字誤植もあり業より體裁など整つて居やう筈はないが物資の悉く罄亡せる直後に於てなされた東都に於ける唯一の印刷物である、罹災を免れた社に於てすら九月二日には東京に於て何等の印刷物を作り得なかつたのに一本の活字まで燒燼せる我時事新報社が擧り之をなし得たことは我社の誇りでもあり又印刷界の奇蹟とも言ひ得る、此記念すべき第一號外に記載された項目は左の通りである。

- 一、全市大破壞京橋日本橋等目抜き場所は悉く焦土化す
- 一、荒池一帶島有に歸す死傷者多數の見込
- 一、被害の中心沼津小田原最も激甚
- 一、吉原全滅淺草十二階中崩し壓死者燒死者無數
- 一、慘憺たる兩國方面、二千人餘河中に燒死す
- 一、松方公重態、別荘倒變して負傷
- 一、東海道客車順豐
- 一、政府應急策を講ず、大阪より白米六十萬石取寄す
- 一、岡田男壓死す、別荘倒壊して
- 一、北都一帶焦土化す

**糧食買入難** 從業員の大奮闘により號外の印刷数は頻りに増加する、維持するまでもなく次から次へと配送される、假工場を作製は恰も第一線に立つ職員の働きがある、而も兵站部の手廻りが未だ整はないので兵糧が續かぬ、差當り調度部の斡旋により一半の玄米を

得て工場員の費飯に供したが次の工夫がない、會計部に於ても總ての關係銀行が罹災した爲め金の調達がむづかしい、幸ひなるかな大塚氏の囊中前月俵給の残金がある、之に能崎部長の持合せを加へて多少の現金を得、人を各米屋へ馳せて糧食の買入れをなさしめたが白米は俵々見當らず、玄米も三升五升の小賣は兎に角一俵と纏まつては賣つて呉れぬ、漸くのこで一斗五圓内外の相場を以て七俵の玄米を買集むることが出来た、之で工場員全部が三四日間の飯を凌がなければならぬ、卵大の玄米俵二個宛が一人一食分と定められた、澤庵福神漬などは當時に於ては最も贅澤視されたもので、實は飲料水すら水道の鐵管破壊の爲め思ふに任せず僅に残る井水を汲んで煮粥の手段もなく生水の儘湯を降する状態であつた。

**鮮人襲來騒ぎ** 一方に營々仕事を馳み一方に奔走糧食を求むる中に晩夏の日脚も早や黄昏る、午後五時半頃に及んだ時附近町内俄に騒然たる情狀を呈した、何事かと聞く暇もなく老若男女の逃げ惑ふものタイプライター會社の裏門邊より續いて時事新報假工場邊を通過して口々に朝鮮人二千餘名武器を以て夷比須邊まで襲來し今將に豊岡町邊へ殺到し來ると云ふ、流石職責に忠なる我工場員もスワ一大事と群衆に連れて浮足立つた、能崎部長は突嗟其說傳なるを信じ「鮮人襲來は虚説だ、騒ぐな、逃ぐるに及ばぬ」と大聲連呼漸く制止した、群衆の騒ぎに連れて一部は散り々々になつたが獲れるものは大膽にも尙號外の印刷を繼續する、午後七時四邊暗黒となるに至つて漸く仕事を止め能崎部長自ら殘存號外一千五百枚を持つて豊原養老内の假本部へ赴いた。

**三田山上の假寢** 三田山上の光景は物々しくも何とも形容の出来ない有様であつた、數百の學生は兵式教練用の銃剣を揃へて整列に任じ數千の避難民は手に手に竹槍棍棒其他の得物を携さへて非常に擁へて居る、積語頻りに傳はり警報鐘を響く状態は恰も敵前に面し



たる戦陣の有様であつた、此混亂中尙且つ小川、杉山、石田、松尾其他諸君が夫々社務を分擔して活動しつゝあつたのは工務の努力と相俟つて多きべきである、斯くて熊崎、小川兩部長は共に福澤家を訪ふて山上の秩序維持に關し意見を述べた後更に各自の任務を執つた、當夜残留せる社員は次第に帰宅し又は知人の許に身を寄せたものもあつたが熊崎大塚諸氏は夜更けて後一般工場員等と共に一枚の敷物もなく被るべき蒲團もなき義塾講堂の床上に就日來から着のみ着の儘の洋服姿にて靴も服が身を横たへたが二日越しの疲勞も群衆の騒音と時々來る餘震とに驚かされて冷き假寐の夢も兎角覺され勝であつた。

### 臨時委員編成

明くれば九月三日帝都の三分の二、二十五萬戸を焼燼し累々十萬の焼死者を出した未曾有の劫火は悉く終熄したが物情尙穩かならず餘震は頻々として來る、通信交通機關は勿論衣食住の道も全然停止されて所謂手も足も出ぬ状態である、併し我々が部及び假工場へ午前九時頃より漸次集合した社員員数の數は前日よりも餘程多きを算する、取敢ず出勤した人員のみを以て臨時に仕事の分擔を定めて善後の措置を進むることゝなつた、編輯や工務、會計等は大體平常と變りはないが應急事務として糧食係、自動車係、焼跡整理係等も出來た、秩序的復興の第一歩は正に三日の日に定まつたのである。

### 號外二回發行

新聞復興の先馳は申す迄もなく工務であらねばならぬ、熊崎、大塚其他工務諸氏は早味假工場に出勤して引續き非常装置の下にモノタイプ活字を鑄造する一方前日買約せるカスチング四台の引取りを急いだ、自働車の配給思はしからず二三時間を経過せる中某社の爲め二台を無斷持去られてしまつた、併し其不徳義を責むる暇もなく他の方面を奔走して更に二台を手に入れ都合四台を運び込んで鑄造の用意をした、勿論瓦斯はないから炭火を以て鑄金する外はなかつた、斯る中に編輯局より編々原稿は工場へ廻る、其の場か

ら號外を組む、前日に比し非常に手廻りよく當日は山本内閣成立を始め三回の號外を發行することを得たのは豫想外の好成绩であつた。

### 工務復興方針

此日午後一時熊崎工務部長は工場員一同を假工場の一角に招集し一場の訓話を試み大震當日以來の献身的努力、犠牲的奮闘を賞揚感謝すると共に今後新聞諸君と共に社業の復興に全力を盡さねばならぬ旨を述べ、殊に關係銀行燒失して金懸意の如くならず、物資灰燼に歸して糧食すら不足の懸念あれども飽まで困苦缺乏に堪へ協力一致天災に打勝つる覺悟を要すと論じた。斯くて工務復興の方針は先づ一日も早く四頁新聞發行を取急ぎ然る後八頁に及び結局十二頁に復舊する目的を以て各分擔を定め滿漚すべしと云ふことになり第一着手として活字ケースの組織を定むることを池嶋文選長、安藤次長、山本、稻生、岡村等の諸氏に委嘱しケース一千五百枚の作製は直様高橋木具店に注文することとし、第一次分としてモノタイプ及びカスチングを用ひ七ポイント七半、五十萬本を鑄造する方針を立てた、實は七ポイント半の活字を望んだのであるがモノタイプが全部七、七五なる故に鑄造能率の上から第一次分だけ此方を執つた次第である。

### 大阪へ機械注文

工務復興の大體方針は已に定まつた、一日も早く輪轉機の据付に着手せんことを考へたが此日(三日)は未だ東京機械製作所の職工一人も出勤せぬので何とも致し方がない、森川青木兩氏を訪ふて只管懇願するのみであつた、斯る處へ意外にも大阪時事新報營業局長福田寅治君が今次の大變災に驚いて途中大困難を嘗めつゝ信越線を迂回し大宮より草鞋掛で漸く我本部へ到着したのに會した、早速同君を煩はして大阪方面で輪轉機を少くとも三臺以上を調達すること及び活字百萬本並に工場用品數種を取揃へ急送する様に依頼した、此火急の用件に福田君は遠路の疲れを休む暇もなく再び迂路を経て歸阪することゝなつたのである。

### 機械職工の送迎

九月四日假工場の手配りは漸次順調となり四回の號外を發行す、此上は一刻も早く輪轉機を据付て大量印刷を



考へねばならぬ、而も物情尚ほ惻々として交通機關社總の爲め東京機械製作所の職工は未だ出勤せるもの稀である、茲に於てか能崎工務部長は同社職工の待出し送迎は結局本社復興の捷徑であるを考へ毎朝自らトラックに便乗し大崎大井方面へ東機職工の待出しに出掛けた、幸ひ職人を得て東機社前へ歸れば罹災各新聞社の人々何れも自動車で詰掛け居り折角本社で迎へて来た職工を甲社へ一人乙社へ二人と意外なる争奪戦が始まること云ふ有様、斯る状態は四日以来十餘日間繼續したが能崎部長の斯の如き努力も亦本社復興促進に大なる好影響を來したのは云ふまでもない。

**機械工場借受**

九月五日假本部に於て本社重役會が開かれ復興上に關する種々なる協議があつた、此日號外を發行すること三回、諸般の準備も着々進捗する、前日來タイプライター會社と相談中であつた同社第一工場隣なる西洋建一棟を印刷工場として借受の約束が成立した、同建物は建坪僅に五十四坪の二階建て素より快陸であるが今の場合建物の適否を云々する暇はない早速震災に傷ついた外壁の修繕をなし輪轉機据付の基礎工事に取掛つた、一方文選假工場は二十餘坪の建物に差掛式のバラック三十年を増設して僅かに雨露を浴ぐ設備が出来た。

**石油發動機購入**

九月六日、號外四回を發行す、此日より紙型鉛版を用ひ手刷り機を増して號外の印刷数を大いに増加した、輪轉機基礎工事は着々として進み夕景までにコンクリート打ちも出来上つた、明日一日だけ凝固の餘時を置き愈々八日より機械据付に着手すること決した、而も電動力の來る見込がないから萬一の用意に於て池田製作所より十馬力石油發動機一臺購入の約束をしたが之は後日に至り結局不用返却することにした。

**舊活字三十萬本**

九月七日號外四回を發行する、明日より据付くべき輪轉機は東京機械製作所より運搬せられる、紙型鉛版其他も序でに持込まれる、工務の多忙は名狀すべくもない、一方モノタイプはガソリンを應用することを工夫し又燈火用電力も僅に送らるゝ様になつた爲め大分能率を増しカスチング鑄造の分を合せて早くも十五萬本の活字が出来たが未だ四頁新聞を作るには非常に不足である、餘儀なく一時の間に合せに舊五號活字三十萬本を購入した、活字ケースも新注文は到底急場の用に立たぬから能崎部長自ら牛込方面へ出動して舊ケース三百枚を買集めて來る、現業の指揮又は整理は大塚氏に出つて着々好結果を見つゝある、今は輪轉機の据付さへ出来れば新聞發行は何時にても差支へなきまでに完備した。

**輪轉機据付**

九月八日號外三回を發行す、此日は愈々輪轉機据付に着手の日である、東京機械の宛地雄也君が据付主任として出張した、能崎部長は本日より指を屈して三日間に必ず完成すべき旨を命じた、マリノニー輪轉機据付には大抵一週間以上十日位を費すのが從來の例である、三日間の限定は随分無理な注文であるが菊地君は之を快諾し、夜を日に繼いで奮勵し只一日の工程に驚くばかりの成績を示した、斯くて新聞發行の前途に十分の光明を認めたとが只茲に不足なのは印刷用ルラの原料なきことである、有らゆる方面へ問合せたが急に間に合ふ見込がない、府下中野の鳳葉堂へ二回も往復して十日までに調合する機約束して歸つたが尙不安心だから遠く宇都宮方面へ人を派して地方新聞社の剩餘ルラを分譲して貰ふことにした。

**紙型鉛版機据付**

九月九日號外三回發行す、一方小高係長其他の努力により紙型鉛版の設備が着々進む地金、紙型材料等も已に整つてゐる、鑄型、鋸口切、裏押機等夫々の場所が定まる、服部君の奔走により市電東電線から動力線も引込まれる、輪轉機は中川機械



係長の應援により益々工程が捗る、今は只ルラの一事を修すのみである、前日の約により熊崎部長例によつてトラックを起らして中野の小籠へ行く、鳳舞堂では今數個の銅鑄でルラを煮つゝある最中である、到底冷却を待つ暇はないから銅鑄の儘より引抜いて全部を持歸るさといふ有様、斯て同夜は係員を徹夜せしめて印刷用肉棒の製作に従事せしめた。

### 寫眞製版準備

九月十日號外四回を發行す、諸般の用意は略整つた、然々明日十一日印刷から四頁新聞を作り得る旨工務部より編輯部へ通知せられた、豫想外の速かさに社中の大多數は寧ろ半信半疑の有様であつた、而も工務に於ては同日より寫眞銅版をも自力にて製作する方針の下に數日前から櫻井製版主任が極力盡力した爲め可なり準備は整つたが鹽化鐵グリー其他の藥品が拂底で甚だ不安心である、山手方面又は品川邊の藥店を漁りに漁つて漸く小量宛を買集めて一時の間に合せるだけは出來た、諸機械は幸ひにも大震當日猛煙を引し熱火に製はれつゝ搬出したものが今ぞ立派に復立つ譯である、併し未だ水道出ず瓦斯なくアーク燈なし殊に暗室の設備も出來ない、製版の困難は想像の外にある、即ち二階に大樽數個を据付け井水を汲み上げて水道の代りとし炭火の準備して瓦斯に代へ、暗室は甚だ尾端なれども洋館二階の便所に修理を加へて間に合はせることゝし兎も角十一日より製版することゝなつた、之亦罹災各社に類例のない迅速さで他社が十月に入るも尙製版を他の方面へ依頼せるのに本社が九月十一日から製版し得たのは異常な成績である。

### 四頁新聞發行

九月十一日愈々四頁新聞製作の豫定日である、二日以來連日三回又は四回宛發行し來つた號外も此日は續て四頁新聞に力を集中することゝし文選の手によつて編々原稿は活字となつて行く、モノタイプは主として鑄造用に使つて居るが一二葉は常に文選用にも供した、活字の不統一は作業上種々なる面倒を來したが大體に於て仕事の能率は拂りつゝある、一方八日以來連三日の豫定を以て据

付け中の輪轉機は十日深夜までに組立を終つた、十一日は早朝よりベルト掛けをして居る、僅三日間で一臺の輪轉機を据付けたのは我國に於ては未だ曾て例のないことである、モーターも前日に据付を終り電動力は來て居る、最早何時にても運轉差支なきに至つた、午後四時頃に至り四頁の組版は活版課の手を離れて鉛版係へ移される、寫眞版も出來して居る、忽ち炭火乾燥の紙型が出來て鑄込に廻る、久しく自動製版機に馴れた人達は十年も昔に立返つた様な感じで手鑄込から鑄込切、裏押鉋削りと一方ならぬ煩はしき手数を經て漸く午後六時頃八枚の鉛版は新輪轉機に製備せられたのである。

### 一二日に亘る徹夜の印刷

大正十三年九月十二日(水曜日)の日附ある四頁の時事新報は大震當日の號數を追ふて一萬四千四百二十三號と記され臨時定價一ヶ月五十錢として愈々九月十一日午後六時より三田豐岡町の假工場に於て印刷に附せられんとしつゝあるのである、罹災新聞社の自力に依つて發行せらるゝ最初の新聞である、過ぎし十餘日の惡戰苦闘を經たる工場員は勿論全社悉く一種緊張せる氣分を以て新輪轉機の回轉し初むるのを俟つて居る、巻取紙は版胴に挿入せられ電力のスキッチは切られ、モーターは呻りを立てゝ急轉し始めたが、意外々々調帯は徒らに這つて輪轉機は廻らうともしない、變色は全員の面上に浮ぶ手に汗するもの、首を捻るもの、懼みの眼を睜るもの、千態萬様の光景裡に關係者は全力を揮つて其原因を探つた、餘り精巧に組立てられた爲め空廻りなら運轉に差支へないが巻取紙の厚さが加はつて機械の齒車が重く電力不足の五馬力を以てしては運轉困難の事情がわかつたので早速部分的の修補を加へ漸く午後八時に至り完全に運轉を見るに至つた、其時の喜びは茲に贅するまでもない、夕刻より不安の懼みに彷徨して居た神吉營業次長は暫へず熊崎工務部長の前に進んで堅く握手を交はす、感極はまつて兩氏の眼底一點の露を宿せるを見た、斯て多數關係者の環視の裡に輪轉



機は同様の音も勇ましく快速に巻取紙を消化して行く、嫌一嫌印刷された新聞紙は堆積して發送係へ引渡される、深夜の一時二時に及ぶも轟々たる機械の音は瞬時の定みもない、熱心なる係員は一睡だもせず忠實に立働いて居る、新聞を運ぶトラックの音と輪軸機の響きとは物静な夜の空気を動かして町民の夢を驚かしたことも幾度であつたらうか、遂に徹夜印刷を繼續して東天日已に三竿に至つたが尙機械の運轉は停止せぬ、人も機械も不眠不休の活動は擧げて此報消機關てふ公益事業に集中されて居るのである。

### 全社の活氣漲る

九月十二日、太陽は既に中天に高きも前日より刷始められた新聞は尙引續き印刷されて居る、一方十三日附新聞の原稿は早くも文選係の手に處理されつゝある、大災後始めて發行された四頁新聞に編輯も營業も活氣頗る加はり意氣感々旺となつて瀟灑たる活動振を示して居る、工務に於ては市外郊村より徒歩數里を厭はずして毎日通勤せるものや孤を破り冠を着て假工場に赴臥し或は炊米の握飯に生水を飲んで饑を凌いだ連日の苦闘が漸く効を奏して罹災社中自力印刷に於て第一番の名譽を博し直には第二番に續くものなき程の好成績を得たのを互に喜び且祝して尙今後の奮闘を誓つて居る、中にも熊崎大塚兩氏の如き大災當日以來未だ一度も歸宅せず家族の安否を問ふ暇もなく、臭衣弊履を物とせず垢面蓬髮を意に介せず、晝夜に亘る奔命心勞漸く其果を結んだのであるから其満足や申すまでもない、山本、戸張、小山の諸重役、板倉主筆、明石編輯長、伊藤同次長、大西支配人等交々工務の努力を感謝せらるゝのも亦理りである、尙本社より數日を遅れて東京朝日新聞社に於ても、一臺の輪軸機を据付四頁新聞の自力印刷を開始したが同機械は熊崎氏が曩に東京機軸會社より買約したものを同業東朝の爲に特に之を贈愛すべく東機の青木重役に默諾を與へたものである、斯る非常の場合に於て同じ罹災社として同業他社の復興に便宜を與へたことは新聞界の一美談として世間に賞讃せらるゝのも尤もである。

### 販賣部の活動

之より先販賣部に於ては一日も速かに全國の時事新報讀者に代用紙發送の必要を認め九月五日社員堀口、松尾其他數氏を信越線經由大阪に急派し連日大阪時事新報を數千部増刷して時事新報代用紙として全國の讀者に配付した、京濱、東北方面へ送達するものは船便により芝浦へ陸揚し之を自動車にて一日三田山上へ運搬し更に荷造りして市内又は地方へ轉送する、就中東北行は遠く大宮停車場へ自動車で運搬し夫れから汽車で發送すると云ふ次第で其混雑繁銷名狀すべからざるものがあつた、相情中村發送係長負傷缺勤中の爲め販賣部の宮野君を始め發送係諸君は一入困難を計めた様であつた、斯て十二日本社で四頁新聞を印刷する様になつて後も亦發送上一方ならぬ苦辛を重ねた、假工場で刷出された新聞紙はトラックで三田山上に運ばれ其處で荷造りをなし、改めて自動車に積込み或は新宿に或は大宮までも運んで汽車に積むといふ譯、其勞力と時間を空費すること一通りでない、加ふるに市内配達人の不足は種々なる不便不行屈きを生じ又製紙會社より供給する巻取紙は震災の影響にて非常に不足を告げ本社の希望の半數しか間に合はぬことも數日に亘つた、勿論最初一臺の輪軸機を以てしては晝夜休まず運轉しても尙且つ全部の讀者に配付するだけを刷出し得ないから十五六日の頃までは引續いて大阪時事を代用紙として用ひた部分もあつた、實に此の煩雜なる任務に當つた販賣部發送係の苦辛は工務の艱難に相並いで極はめて大なりと云はなければならぬ。

### 各部署の繁忙

大西支配人、神吉次長は連日假本部に出動して指揮計數に日も之れ足らざる有様である、福澤社長は葉山別荘で震災中震災に遭遇し健康の不良と交通の杜絶とに未だ同所に滞在中であるから日々の状況は特使を以て報告することになつて居る、石沼博君や荒井涼君など草鞋掛で特使の役を勤めた、何しろ閑な所は一ヶ所もない、一時悲觀の傾きがあつた廣告も左氏部長、曾我主事などの盡



力により日増しに景氣はよいが紙型物が少しもなく全部組版にしなければならぬのは工務の勞を一層大ならしめた、又多年時事新報獨特の稱があつた「よろづ案内」は一時焼残つた社の爲め多少荒らされた様子もあつたが赤城其他係員の努力により忽ち取返して寧ろ倍舊の信用と申込みを得るに至つた、會計調度の任務も頗る多忙繁雜を極はめたのは申す迄もない、銀行は大口支拂ひをせぬ、購買品諸給與は總て現金支出である、其間に立つて大西支配人、小川會計部長の苦心は察するに餘りある、調度に於ては物資缺乏の場合に處して糧食の心配、自動車自働車の配備、應急用品の調達等目も廻る忙しさである、殊にガソリンの供給不足は十數日に亘つて調度當局を苦しめたこと最も甚だしかつた様に思はれる、能崎部長が工務の爲め一毫の専用自動車を要求したが夫れさへ數日間都合が付かなかつた、若しも自動車とガソリンの配給が今少しく圓滑であつたならば四頁新聞の發行は更に三日間を早め得たとは能崎部長の永遠に忘れ得ぬ遺憾である。

**相互扶助の美事** 本社従業員中全焼の厄に遭ふたものは殆ど二百五十名の多きに達した、其中工務關係者が百〇七名もあるが一般社員の復興に熱中せる人々は家を忘れ身を顧みず晝夜を分たぬ勤勞に服して居る、此場合に於て幸ひに罹災を免れた人々の同情が全燒者の上に注がれるのは當然のことである、同僚知友の間に相互扶助の行はれた實例は殆ど枚擧に盡がない、例へば下田經濟部長其他の諸君が蒲團や洋服を罹災せる編輯同僚に提供した如き、又工務の大塚氏が自己も全燒の厄に遭ひながら僅に取出し得た三組の蒲團を悉く工場員の宿直用に提供し自身は延を被つて板床の上に睡りを取つたなど最も美しき事實である、能崎工務部長は工場員の罹災見舞として金二百圓を寄贈し大阪時事新報社中よりも數百圓の見舞金 came、本社及び福澤社長からの救恤金も罹災者に分たれる、社員有志に依つて組織されて居る相互會、時友會も亦其資力の限りを盡して罹災者に見舞金を贈つた、工場共濟會又其目的に従つて救濟の實を擧ぐる等濃やかなる人情美、澁らけき互助の精神は此の非常時に於て遺憾なく發露されたのである。

**救恤と講演** 時事新報社發起に係る義勇表獎會は一般罹災者の爲めに金二萬圓を支出し、社會事業部は其資金を以て大阪で數萬冊のメリヤスシャツを調製せしめ東京及び廣瀨の罹災兒童に分與して汎く救護の一端を表はした、又今次大變災の事實は僻遠の地方程其真相を知り難く殊に鮮人間識なども大變災に傳へられて蜚語流説人心を不安に陥るゝと夥しいから親しく實況を説明して地方民心の安定を計るの喫緊事たるを認め九月九日安倍、荒木、山村等數名の社員を福嶋、宮城、岩手、青森、秋田、山形の下六縣下へ派遣し同十三日より數十回に亘る震災實況講演會を各地に開いたなど如何に本社の活動が各種方面へ敏速に且つ遺憾なく遂行されたかと視はれる。

## 四頁發行より十二頁復舊まで

**本社焼跡の整理** 災後僅に十二日目に四頁新聞を發行し同時に各種方面に遺漏なき活動をなせる本社は當然必須の問題として焼跡整理と社屋建築のことを蹴却する筈はない、最初社屋建築は丸の内内預定地に於てするを可とするの説もあつたが結局南鍋町舊焼跡に交詢社の敷地を加へた八百餘坪の地に假建築をすることに方針確定し先づ當面の急務として焼跡整理の爲め臨時編成に基いて九月五日以來左氏曾我兩氏が現場に臨み人夫を督して焼失機械の周圍より焦土の取片付に着手した、晩夏の苦熱を浴びつゝ濃々たる砂塵眼を蔽ひ、紛々たる異臭鼻を衝く間に立つて行動する其勞苦や察すべきである、木村菊次郎君其他の工務員も連日焼跡へ出張して焼失機械の調査や取毀をなし、調度よりは荒井涼君其他出張して銚流せる鉛の焚直し若しくは焼失物件の取片付に従事するなど恰も戰場を見るが如き光景を呈した。



## 假建築設計

假建築の場所は決した、此上は社屋の設計を必要とする、而も此非常時に際し社屋の速急完成は建築上の第一條件なりといへ、落葉の秋は眼前にあり焦土に歸したる武蔵野の嚴冬は凌ぐに困難であらう、即ち最も僅少なる日時に於て時節柄耐震耐火並に耐寒の目的に適ひたる堅牢半永久的の建築を完成しなければならぬ、之れ重役諸氏の最も苦慮した所で大西支配人が熊崎工務部長に之が略設計を依頼したのは實に九月十五日の夕暮であつた、熊崎氏は素より辭すべくもない、當日の新聞印刷並に翌日の芳針まで確立した後夜の十時に至り大塚氏を伴ふて三田四丁目なる小山完吾氏宅へ引揚けた、蓋し熊崎氏は頃日來小山氏の好意により大西支配人と共に同家に假りの宿りを取つて居たのである、時は九月十五日の深夜、所は小山家の一室、熊崎大塚兩氏は卓を圍んで明石編輯局長提案の意見を参酌しつゝ、假建築の作圖に着手したのである、深々と更け行く夜中、薄暗き燈火の影に、相對せる二氏の形容は連日の苦闘に何れも體量二貫餘を減じて憔悴せる顔、窪める眼、埃に汚れたる服、無難に延びたる鬚鬚、而して黙々として寸を畫し分を刻んで定規とペンを運ぶ有様何に譬へんものもない、若し透し見るものあらば一種の不氣味を感じる位だつたらうと思ふ、作圖は用紙がない爲め號外を印刷した損紙の裏面を用ひた、如何に物資缺乏の甚だしかつたかよくわかる、斯て夜の十二時は過ぎて午前一時に至り間口十八間半奥行三十三間前山及び東側の一部を二階建てした總建坪七百三十坪の設計原圖は出來たのである、晝間の疲勞は甚だしく睡魔は頻りに襲ふが明けなば又も今朝より予定の任務が待たはつて居る、是非とも今夜中に圖面の清書をしなければならぬ、遂に大塚氏は熊崎部長の命の儘に徹夜して之が清書を完成した、其勞苦や多ししなければならぬ「マサカと思つた徹夜清書の命令を受けてツクタク情けなく感じた」とは大塚氏の僞らざる告白で、命ずるもの命ぜらるゝもの共に非常の覺悟あればこそ斯く短時間の中に大建築の作圖が出來上つたのである。

## 大林組と建築契約

假建築の圖樣は已に出來上つた、大西支配人は九月十六日各要路に訪つて之に多少の修補を加へ直に大林組を招致して建築上の契約を締結した、移天なる半永久的大建築、經費殆ど二十萬圓を要する大社屋が僅か三時間内に設計せられたのも異例なれば翌日直に請負契約が成立したのも亦奇蹟である、如何に本社當局が復興に果敢勇決なりしかを覗がふに足るべきである、斯て大林組では數百人の人手を發して焼跡の整理に着手し大阪より船便輸送の建築材料は數日ならずして明石町河岸へ山積されたのである、大林組では土居鎌吉君現場監督として精勵格闘し、本社よりは石川義昌君が特に選ばれて建築係となり、熊崎氏は原案作圖と工場施設の關係に於て豊岡町の假工場と建築現場とを半日づゝの掛持に奔勞し朝に夕に工程の促進激勵を怠らず日一日と進捗目覚しき状態であつた。

## 朝刊八頁計畫

十二日以來四頁新聞は極はめて順調に發行され一台の輪轉機は晝夜殆ど一刻も休止することなく當日附の新聞を刷り終れば直に翌日附の新聞を開始むること云ふ有様、卷取用紙も神吉次長の盡力により漸く十五六日頃より所要量を配給さるゝに至り深夜數十貫の卷取紙の取卸しに地盤き立つて附近の人々を驚かしたことも度々あつた、只十八日晝間鉛版工場に小火事件があつて新聞印刷上多少の支障を來したが之は品中隣吉君の好意により附近の空地に鉛版工場を移して總て一段落を告げた、一方活字鑄造の工程はモノタイプ、カスチング各數台の運轉によつて既に數十萬本を得たから舊五號活字の混用は十五日以來之を廢し七、七半を以て全四頁を作る様になつた、疊に大阪時事新報社へ注文した七半活字も棚専務、福田營業局長及び大喜多活版係長などの盡力で去る九日第一回分として約五十萬本及び活版用雜具を取揃へて發送され鐵道特別取扱ひによつて十八日漸く到着し之が整理の爲め仲ノ子君も上京した、又同日以來假工場に振付を始めた第二號輪轉機も二十三日試運轉を行ふて好成績を得た、今は第二次計畫たる朝夕刊八頁發行は何時にても差支



へなきまでの準備が整頓した。只憂ふべきは天候險惡の模様あり、寒氣俄に加はつて作業を妨ぐる一事である。

### 愈々夕刊發行

朝夕八頁計畫は愈々熟して二十五日より夕刊發行の旨一般に通達せられたのは二十四日午前のことである。此日恰も編輯局は執務上の便宜を考へ慶應義塾を拂つて帝國ホテルへ移轉する日である。内に原稿の準備をなし外に引越しに奔勞する編輯各員も亦甚だ多忙と云はねばならぬ、而も前日來險惡なりし天候は遂に大暴風を齎して明日の夕刊發行準備に竹殺されつゝある工務當局の困難と假工場の状態は名状すべき言葉がない、四分板ミトタンの交疊に成れる假工場のバラツクは雨漏り漏の如くケースを渡し、側面より横吹きに吹き付くる雨風は嚴冬の寒の如く冷たく、衣袖は捲上げられ手指は凍へて作業を妨ぐることを夥しい、加ふるに潮々として附近より小川の如く假工場に流れ込む雨水は腫を没する有様で恰も荒天の野外に行動するに等しく準備の進行中々に意の如くならないが忠實なる工場員は雨さ職ひ風を凌いで能く全力を盡くし深更までに漸く一切の用意は完了した、此大苦心大努力の結果は空しからずして翌二十五日は豫定の如く何の支障もなく夕刊を發行し得て、茲に朝夕八頁計畫は目出度遂行されたのである、新聞定價は當分の中一ヶ月七十五錢と定められたのも時節相當を得たことであらう、朝夕八頁發行も亦權宜新聞社中特殊の成績であるが只東京朝日新聞社が本社の夕刊發行計畫を前日探知し必死の努力を以て結局本社と同時に朝夕八頁となし得たのは同業社の一成功と稱して餘りある譯である。

### 活字輪轉機の増設

八頁計畫は已に遂行された、第三次計畫たる十二頁復舊は當然之より促進さるべき問題である、福澤社長は華山より出京し一夕慶應義塾の講堂に本社幹部を招集し大災以來の勞を謝すると共に今後の激勵を與へられた、沈痛なる社長の話は幹部連を感奮せしめ一般の士氣を興起せしむるに十分であつた、又震災前渡米した三浦廣告部主事は彼地で大地震を聞き急遽歸途につき九

月廿三日歸社して大に廣告部に活氣を添へた、之より先能崎工務部長は十二頁復舊準備の爲め九月十二日秀英舎に赴き七、半活字二百萬本の至急鑄造を依頼して置いた、未だ瓦斯の供給なく、トムソン鑄造機の運轉不可能の爲め出來期日は明確でないが同社に對し活字鑄造を注文したのは本社が最先である、如何に各方面に對し手廻しよく計畫されたかを想像する一例とするに差支へない、而も秀英舎の機械運轉は本社の活字速成の所以であるから能崎部長は自ら東京瓦斯會社へ數回足を運んで秀英舎に一日も早く瓦斯供給をなさしむべく努力した、之亦當時の苦心を語る一事例である、又輪轉機は九月廿八日に至り第三號目の運轉を始め十月一日には第四號も完成し印刷能力は次第に増進する、一方大阪へ注文した三台の輪轉機も堀、福田其他大阪時事新聞當局者の盡力により其中二台は十月初旬に到着して慶應義塾普通部の屋内體操場に預てある、東京機械製作所にて新造中のマリノニー二台も早や完成して居る、大災當夜注文した自動製版機二台も旬日を出でずして出來る見込である、之等は何れも南郷町に建築中の新社屋に据付の豫定で今の處聊か舊の持腐れの感はあるも復興上綽々たる餘裕のあつたことを示す一例とも云ひ得る、又疊に大阪へ注文した活字の中約百萬本は已に大阪時事の手を経て岡本活版所より發送され整理の爲め野々村君が上京する、最早殆ど十二頁復舊の用意は出來上つたが只假工場狹隘の爲め何とにしても新社屋の完成移轉を急ぐ外なき有様であつた。

### 漫畫及少年少女復活

新聞發行が極はめて順調に復興しつゝあると同時に本社獨特の評ある時事漫畫も主筆北澤樂天君の奔勞により形を更たためて十月十七日より復活する、此非常時に於て時事漫畫の復活は一般讀者に一段の驚異を與へ本社復興の餘力測るべからざるものありこの感じを僞さしめた、又少年少女雜誌は漸て從來の菊版を改めて四六二倍版總ポイント五段組とし内容を充實し發行



期も五日及び二十日の月二回とする方針の下に革新準備中大震災に遭遇して一頓挫を來したが、安倍主幹を始め各員の努力により少年は十月號を舊型の儘十月十五日に同十一月號たる革新四六倍版を十一月五日に又少女は十月號を革新四六倍版として十月二十日に發行し目覺しき復興振りを示した。

### 地方特報の印刷

時事新報地方版は從來より各地に於て異彩を放つて居たが大災後にも亦異彩を放つた復興振りを示した。當初大震災の報傳はるや静岡仙臺の二支局では直に號外を發行して縣下讀者に急報したが本社では交通機關不通の折柄地方版は各地方に於て刊行する外はないと意見一致し附近十餘縣に亘り夫々日刊時事新報特報發行の計畫を圖りて橋本地方部長心得、並に各支局員の盡力により各地に於て新聞條條による手續きを了し先づ九月十八日より三多摩特報、二十二日より静岡特報、二十三日より埼玉、二十六日群馬、茨城、二十七日福嶋、山梨、二十八日千葉、十月六日栃木の各特報を發行して各地にも地方特報の魁を作つたが此機會に於て長野縣下に全二頁の信州版を創設することとなり長野に支局を新設し河村剛次君支局長となり十一月二十六日より之を發行して大に好評を博した。

### 新館に機械据付

新館建築の工程は最初焦土の取片付、喪失機械の取拂ひ等に意外の日子を要した様であつたが一度敷地の整理終るや其後の工程大に捗どり十月初旬には已に基礎工事を終へ木材の切組も日増しに進捗しつゝある。此建築工程に連れて大に急がねばならぬのは工場移轉の準備である。即ち十月十一日未だ一本の柱すら立つに至らぬが能崎部長は中川機械係を伴ひて早くも輪轉機据付の用意に着手し、十三日を以て四十餘坪の洋州昇板圖を作り、十五日には二台の輪轉機を持込みて基礎工事を急がせ、十八日より据付に着手した。敷地内には木石亂雑し幾百名の職人土工右往左往し鑿の音の響き、或は七を廻り煉瓦を積むなど一方ならぬ混雑の間に着々

輪轉機据付の工事は進む、之に刺戟されて建築の工程は益々捗どり十月二十五日には已に棟上の慶びを見るに至つた、新製の輪轉機は更に三台を運び込まれる、自動製版機二台も木石雜然たる間に持込まれた、斯る場合特種機械たる自動製版機を一台ならず二台まで見ることは奇蹟的の早さである、斯くて日一日と社屋の屋根は出来る、機械据付の工事は規律正しく進む、未だ社屋の外廊一壁を見ざるに早くも五台の輪轉機は据付けを終つて見事に一列に並列する、四台のコツビープレス、二台の製版機、鋸鋸圖、斷裁機其他の機械も滞りなく据付けられた、勿論水道瓦斯電力等の諸設備も十一月初旬には着々として進捗する、斯く工務の施設の進めば進む程大林組の大工云はず氣力屋、土工、左官に至るまで仕事の場所を縮小されて混雑は愈々甚しくなる有様であつた。

### 文撰及製版設備

所謂駿馬に鞭つて進むに似たる工務の促進行動は文選及び製版の設備にも應用された、大阪より到着の新活字百萬本、秀英舎鑄造の二百萬本及び本社鑄造の百萬本は縮々として屋根ばかりなる新館へ運ばれる、千數百枚の活字ケースは百餘のケース臺上に並列される、階上なる寫眞製版の設備も略出來上り殊に新に凸版製版の計畫も樹て之亦順調に進行する、煌々たる數百の電燈は蜘蛛手の如く場内を照して準備行為は夜業にも目覺しく進捗する、十一月十五日四階の外壁未だ塗られざるに早くも工務の移轉用意は完成したのである、此館にも豊岡町假工場に於ては連日順調に朝夕八頁を發行しつゝあること勿論である。

### 工務の新館移轉

愈々工務の新館移轉は十一月十七日土曜日の夜中に於て決行する旨能崎部長により發表せられた、新館の工程は尚从壁を有せず機械工場の間も未だコンクリートにする暇なく凸凹不整、木石瓦片は各所に散亂して一見新聞製造の作業など思ひもよらぬ有様である、殊に營業事務室、編輯室などは未だ大林組の仕事場を使用されつゝあつて容易に取片付くべくも見えない、社中の



人々は工務の十七日夜中の移転は無謀の舉だと稱したのも多かつたが、熊崎部長は大災直後豊岡町に於て一切無一物、雨露を浴びる根もなき野天に假工場を整へ作業したのに較ぶれば新館移転の如き苦慮するに足らぬとの見地から断乎として移転を決定することになった。折悪く天は再び此難事を妨けて十七日午後よりの降雨は寒風と共に工場員を悩ますことが夥しかつた。大塚氏は部長の命によつて十七日以来蕭々として假工場の取片付、移転準備を整へ荷馬車十臺、トラック六臺を用意し十七日の作業終了を俟ち午後十二時を期して先づ文選、植字、鑄造鉛版等の諸物品の運搬を開始した。一方十八日附新聞は假工場内の四臺の輪轉機を以て終夜印刷されつゝあること勿論である。秋雨そほ降る寒夜の移転は工場員の心身を勞せしむること甚だしかつたが然ゆるが如き忠誠の熱情は一人の不平を口にすることもなく徹夜立働いて車馬は幾往返し驟然に鎮されし新館の内部は類一類器物の充實と人員の暇しさを増したが中に重畳ある鉛版機を積載せる二噸積のトラックは濃霧立置むる三田の中途でバンクしてしまつた。苦心困難の末他の自轉車に積替へ豫定の運搬を終了したのは十八日午前十一時に亘り熊崎部長以下工務部員悉く夜を徹し従業員一同も亦遂に一睡はぬかき休憩の暇もなくして當日の作業に取掛らねばならぬことゝなつた。

### 新館にて初印刷

九月十八日工務部の新館移転は關係各方面へ通知せられた爲め編輯營業の諸氏を始め市内專賣店主任其他の人々は様子如何にご懸念して續續として参集する。夕刊の原稿は帝國ホテル内なる假編輯局より送附される。文選其他の作業は何等の支障なく物の美事に經過する。斯て豫定の順序を辿つて當日の夕刊は一齊に五臺の輪轉機により印刷されることゝなつた。前夜印刷係のもの徹夜して機械の調節、ルラの整着に十分の注意を拂つてはあるが處女運轉の爲め多少の故障もあつて參觀人の手に汗を握らしむることゝ

三度に上つたが幸ひに大した事故もなく、豫期に達する、僅一時間にして各機共順調に運轉を繼續し、シーメンス製の精巧なるモーターの回轉快速の爲め一時間二萬六十枚と云ふ、マリノニー機としては破天荒の記録を示して見る間に何十萬の夕刊が刷出される。之まで豊岡町にて印刷し三田山上にて荷造り發送したる新聞は當日より南郷町から發送されることゝなつた。回顧すれば大災以來實に七十有九日目である。輪轉機が一齊に運轉する轟々たる響きと目にも留まらぬ快速の印刷とは活版、紙型、鉛版の物珍らしげなる作業と共に未だ新聞製作の實況を見しことなき幾百の大林組建築工の目を驚かしたること幾何であらうか。更に新聞の分秒を争ふ繁劇の作業が如何に彼等の執業上に大なる刺激を興へたかは敢て筆を勞するまでもないことである。尙本社周囲の焦土や煉瓦は山の如く積まれた儘で新聞發送上非常に困難であるから、應急方法として東側の積土數間を取除き銀座ウーロン茶店の焼跡へ道を作つて巻取紙の搬入、新聞紙の發送等總て銀座口を利用した如き、復興後の街衢から見れば想像も及ばぬ一事實である。

### 編輯及營業の移轉

工務の移転に刺戟された大林組は夜を日に並いで建築の工程を進める。本社工場員の作業場に立交つて壁を浴るもの、扉を附けるもの、コンクリートを打つもの硝子を拵めるもの、入亂れて大車輪の働きに左しも難然亂然たりし營業及び編輯の各室も見聞間に八九分通りまで完成したので態々編輯局は十一月二十日早朝帝國ホテルを引拂ひて新館に移転し、營業局は同二十四日應急義塾の假本部を取片付けて本社へ引越した。指を屈すれば大災以來已に八十有五日、今や漸くにして一社の各事務を同一屋舎内に於て執り得ることゝなつた次第である。之まで三ヶ所に分離して互に忙しさの爲め相見ること稀であつた社中同人が同じ社屋に机を並べて親しく談笑するのが何となく物珍らしげに感ぜられたのも理りである。斯て十一月二十七日新館樓上に於て移轉祝賀式を舉行し、諸事



日増しに整備する、又假工場に壊されし諸機械も漸次に本館へ運搬され六臺のモノタイプ、五臺のカスチングも夫れ々々運搬を始めて工場に活氣を添へる、輸轉機は十一月末までに二臺を移轉して通計七臺となり残る二臺も十二月初旬には悉く本社内に据付け得る豫定であるから今は何時にても十二頁復舊に差支なき準備を完了し、堂々たる新館の威容と共に社中の意氣は益々昂る状態であつた。

### 新館の概要

新館は木造、鐵筋モルタル造、半永久的の建築で機械工場は鐵板を張つて耐火に備へ、屋根はスレート葺とし正面及び東側は曲尺型の二階建となつて居る、前に記した如く建坪七百三十坪を有し災前の本社總建坪に比すれば約五十坪を減じて居るが屋内は階下に營業局事務室、工務部、活版工場、機械工場、送込室、鑄造室、小會議室、寢室、倉庫其他の各室を配置し階上には編輯室、會議室、社長室、重役室、社員寢室、寫眞室、製版室等を置き各事務の連絡順序を便にし、通風採光に意を用ひ總て能率本位に設計したもので、執務の便利と氣分の爽快とは全く申分ない、當時震災後東京に出来した建築物中の第一に推されたのも偶然でない、斯く出色の社屋も前述の如く未だ四邊の道路に山と積まれた焦土に埋められて出入の不便は一通りでない、市役所の大努力も此多量の燒土や煉瓦を取片付けるには餘程の日數を要すべき形勢であるから本社では自費を拂つて附近一部の取片付をなすなど豫定外の努力も加はつて移轉後の多忙は更に一段の繁きを加へた状態であつた。

### 愈々十二頁復舊

已に移轉は目度完了した、諸設備も悉く整つた、社中一同脾肉を打つて十二頁復舊を待構へて居る、果然十二月一日より朝刊八頁夕刊四頁實行の方針は確定した、一同勇躍し十一月三十日の組版より一日付朝刊八頁とし、同日四頁の夕刊と合はせて茲に無事十二頁を復舊し臨時定價一ヶ月八十五錢と改められた、斯て災後滿三ヶ月にして完全に復舊を遂げた本社は更に進んで復興の道程に邁進することとなつたのである、斯の如く本社の復興が遂に他の罹災社を模範として目覚しく、有らゆるもの、模範的復興なりと云はる、程の成功を収め得た原因は、第一災害當日總ての帳簿書類貴重品を悉く搬出し得たこと、第二大災害夜中に輸轉機モノタイプ其他一切の印刷用具を整へ工場復活の用意迅速なる他に例なかりしこと、第三全社従業員が最も熱心に献身的の努力を盡したこと等にあるは申す迄もない、一例を擧ぐれば能崎工務部長が大災害當日以來社業復興に全身を捧けて歸宅せざること二十餘日、朝夕刊八頁を發行するに至つて始めて大森の自邸を訪ひ家族の無事と自宅の被害状況を目撃したるが如き、又大塚工務員が社務に従事中自宅は全焼の厄に遭ひ、臨月に間近き夫人は漸く危きを免れて知人の家に寄寓せるに拘らず之を訪ふ暇もなく前後四十餘日を假工場に起居し、十月三十一日夫人出産の報を聞いた場合も僅に三十分間産褥を訪ひしのみにて再び出勤し、汲々として復興に全力を盡したるが如き、其他社中多數の犠牲的奮闘が果を結びて他に類例なき成功を収め得たのである。

### 社會事業部の活動

大震災後九旬の日子を経て本社の復舊は完全に遂行され將來の發展準備も着々進行して前途洋々春風の如く希望の光明は昭々として輝いて居る、此時に於て復興記念事業の一として社會事業部の努力により新館樓上に於て罹災兒童作品展覽會を開催することとなつた、之より先社會事業部は震災後大いに規模を擴張し專問の部長を置き矢部前社會部長之に任じ荒木主事大いに奔走の勞を取つて藝には罹災兒童に數萬圓のメリヤスシャツを配給したる外東京及び横浜市内の罹災者の爲めに前後三十回の慰安演藝會を開きて到る處非常なる感謝と歡迎を受けたが、更に十月三十一日には今次の大震災に際し救護其他有らゆる便宜を興へられた米國大使サイラス、ウツツ氏の爲め、又十一月九日には同じく列國大使公使の爲めに對外感謝會を日比谷公園大音樂堂に開いて非常なる盛況裡に



外國使臣に大なる感動を興へ、次で同月二十三日には災厄後約三ヶ月間不眠不休にて帝都の治安維持に努力せる軍隊警官消防手諸員の爲めに慰安會を之亦日比谷大音楽堂に開いて豫期以上の大成功を収めたが茲に改めて本社復興記念として罹災兒童作品展覽會が計畫されたのである。

### 皇族六殿下御臺臨

罹災兒童作品展覽會は十二月十五日より三日間に亘つて本社樓上に開催された、時機に適せる有意義の催しとして一般の歡迎を博し參觀者は陸續に接して新館を埋むる有様であつた、其二日目たる十二月十六日日本社は 開院元帥宮殿下を始め奉り六皇族殿下御臺臨てふ無前の光榮に浴したのである、此朝初冬の風肌に寒しと雖も一天晴朗にして復興氣分漲せる街衢は見も心地よき濺瀾さを示して居る、蹶て其筋より通知せられたる如く 開院宮殿仁親王殿下には陸軍元帥服を召し給ひ、春仁王、華子女王兩殿下を伴はせられ隨員を従へ自動車に御召の午前九時本社正門に御到着あり、本社門野重役、板倉主筆、大西文配人、矢部社會事業部長、熊崎工務部長、小川會計部長、其他各幹部連の奉迎裡に階上の設けの室に入らせられ間もなく 伏見宮敷子女王、知子女王、博英王の三殿下にも隨員を従へさせられ同じく自動車にて御着あり、同様本社幹部の奉迎御案内により階上の御休憩室に入らせられた、斯て門野重役の御先導により六殿下御揃ひにて先づ編輯局を御一覽の上、罹災兒童作品展覽會場へ成らせられ矢部事業部長其他の御説明を聞こし召され未曾有の大災厄が如何に深刻なる印象を兒童に興へたるかに就て深き感動を催させられた御様子であつた、斯て限なく御臺覽あり種々御下階など賜はつて後特に災後の復興目撃しかつた本社工場を御見學あらせらるべく御沙汰を賜はつたのである。

### 六殿下活版工場御成

熊崎工務部長は階上展覽會場より御先導申し上げ徐ろに階段を降つて廊下に出で先づ文選工場へ御案内

内申上げた、總て新調せる器具を並列して一紙亂れず整頓せる新工場内には多數の係員が大家、服部氏等監督の下に平素の如く熱心に作業に従事して居る、熊崎の御風姿を拜して何れも誠意の敬意を表しつゝ、作業は常態と少しも變る處なく實際の状況を察し入れたのである、熊崎部長は 六殿下を文選植字の中階に御案内申上げて詳細なる御説明を試みた、先づ編輯局から原稿を回附するの順序より活版作業に及び活字の種類大小など興味本位に御説明申上げ 本工場内一階の中に集まる活字の数は正に六百萬本（現在は約八百萬本）に達すべく一本の長さ僅に七分五厘なるものを疊に積重ねたと假定せば四十五萬三千尺に上り恰も富士山の高さの三十六倍になり、之を平面に延ばせば約八十五哩に達し東京驛より沼津驛に至ると説明せし時など各殿下とも御興趣殊に深かつた様に拜された。

### 印刷實況御臺覽

次で植字工場より解版作業を御覽の上鉛版工場へ成らせられ活版が紙型に變じ鉛版となり精巧なる自動製版機によりて仕上げらるゝ實況に感嘆の辭を洩らし給ひ、夫れより印刷工場へ進ませられ九臺の輪轉機が轟々の響きを立て、一齊に運轉する壯觀を見そなはせられ、此處にても熊崎部長は罹災常夜購求せし記念すべき第一號機を始め各機械の事、作業の事等を詳細に御説明申し又御下階に御答して巻取紙に言及し一本十二連巻の巻取紙は一萬二千枚の新開紙を刷出すべく之を漉なぎ合すれば延長約六哩に達す、本社にて毎日使用する用紙を百本とすれば延長六百哩に達し即ち東京驛より東海道を山陽線に亘り周防の岩國に到るべく、百二十本とすれば馬關海峡を越へて門司に達す、其三十五日分の使用高は正に全地球を一巻きにするに足るとの説明を聞こし召されて深く御驚嘆遊ばされた御様子であつた。

### 優渥なる御賞辭

次で發送の光景、活字鑄造の實況、モノタイプ運轉の有様等御覽になり特に 開院宮殿下には三種約三萬個



の字母に御目を止めさせ給ひ能崎部長より之等は總て震災當時雨と降る火の粉を打拂ひ渦巻く煙を突破して搬出したるものなことを甲上けた所、元帥宮殿下には本社の各員が未曾有の天災に際して危険を冒して勇敢なる行動に出たるは眞に日本魂の發揮である、又當夜全市大混亂の最中に早くも輪轉機其他一切を買入たるは正に金鶏勳章に値ひすべしとて申すも長き程の御遊樂を賜はつた、斯くて能崎部長の御先導により營業局を御一瞥後再び階上に成らせられ北澤樂天畫伯の席巻に興を催させられ更に製版部に御入りの上寫眞製版、凸版製版の實況並に説明を聞き召され、已に現像の出来たる御到着光景の御賞眞に笑みを湛へさせられつ、門野重役の御案内により御休憩室に入らせられた後茶菓を献じ兒童の作品數點、樂天畫伯の席巻等を御賞納あらせられ各殿下も非常に御満足にて御歸還遊ばされた、大災後新聞社へ、皇族殿下の成らせられたのは之が始めてであり又親しく工場へ御察臨作業の實況を御賞あり、一時間以上に亘る詳細なる御説明を聞き召されたのは全く他に前例のないことで本社一同の深く光榮とする所である。

**高速輪轉機注文** 無上の光榮に浴したる本社は一層の活氣と生彩を加へ紙面の内容は益々充實する、販賣部数は益々増加の勢ひを示す、九台のマリノニー輪轉機のみを以てしては今後の増紙を印刷することが不可能である、殊に本社特有の歴史的高速輪轉機二台も大震災により焼失したところであるから之が補充の必要もあつて特に最新式高速輪轉機を購入することとなり、歐米に於ける有名な機械會社に就て研究中であつたが本社移轉前十一月十一日能崎部長は大西支配人の意を承けて大阪へ出張し親しく大朝大毎の高速機をも比較調査して社長に報告し結局エル、レイボルト商會の手を経て獨逸フランケンタール、アルヴァート會社へ注文することとなり十一月二十九日大西、能崎兩氏はエル、レイボルト商會に赴き右高速機四ユニット並に紙型鉛版機其他附屬品一切を注文した、該機械は四ユ

ニット一時間の印刷能力四頁大四折二十四萬枚で四ユニット連結六十四頁までを自由の頁數に刷出し得べく、又精巧なる電氣裝置の下に入個のモーターにより各ユニット個々の運轉停止、緩急運速も自由自在で斷紙の場合自動的に運轉を停止する裝置も在り、レーテストニュースの新味も添へられ機長の長さ一萬千八百六十耗、幅五千三百八十耗、高さ四千三百二十五耗、全重量六十五噸、刷出口八ヶ所、前後に大巻取紙十四本を懸置し得るといふ壯大なものである、鑄型機なども最新型に依り殊に日本新聞紙の特有たる關外裝置の如き從來露型製版機共別個のものを應用する外なかつたが能崎氏の發案により同一機械を用ひて關外付、關外なしを自由に製版し得る等他に比類なき工夫が凝されてある、其他東京新聞社に於ては未だ用ひられて居ない獨逸ビツコール製のローラーキヤスチングも注文され工務の新施設は着々として、前途の大發展に備ふべく用意されつゝあるのである。

**福澤社長の美譽** 斯の如く復興の一路に激瀾氣鋭の進展を續けつゝ十二月末には印刷部數も災前に比し數割を増加し、廣告收入の如きも未曾有の記録を示すに至つたが大震災の損害は頗る莫大で殊に新興の事業は自ら諸般の經營に非常の増大を來したのも已むを得ないことである、震災の大損失は有形無形、又直接間接に亘り殆ど的確なる計數を示し難いが少くとも有形損害のみで百萬圓以上の上るであらう、併し大正十二年下半期末の決算に於て震災の直接損害として帳簿上に現はれた金額は五十餘萬圓に過ぎない、之は株主會議の結果本社の資本金五百萬圓を四百五十萬圓に減資して決濟することとなつたが我が敬愛なる福澤社長は今次の大損害を各株主に負擔せしむるに忍びずして右五十萬圓は全部自己の持株を提供せらるゝ旨申出られた、此の義に厚く情に深き福澤社長の志は一般株主の非常なる感激の下に受容せらるゝこととなつて本社の缺損は帳簿上立派に補填せられ損失を免れた他の社と同一スタートに於て大競争場裡



に臨み得ること、なつたのは社中一同の深く社長に感謝する所である。

## 復興より発展の一路へ

越年後の時事新報 大正十三年一月一日の初刷時事新報は實に未曾有の大部數に達した、景氣よく運轉する九台の輪轉機は時間を延長して多量の巻取紙を消化して行く、山の如く刷出されし新聞紙は十台の一噸積トラックを以て各方面へ發送される、歡喜に滿てる社員の體、嬉々として立働く工場員、元氣よく輸送に従事する發送係、何れか之れ程の表現ならぬはない、天地に轟く「時事新報復興萬歲」の聲は松の緑の中に起つて一年の計は早くも「整理復興」の舞臺へ歩を向けられたのである、即ち部數の大増加は廣告の効力増加を意味し、當然の結果として料金値上げを斷行することとなり、從來普通版一行一圓二十五錢なりしを一圓四十錢に改定して三月一日より實行される、販賣定價も十二月一日以來十二頁一ヶ月八十五錢なりしを四月一日より一圓に値上げされ、而も購讀者は一段の増加を告ぐる好成绩を示した、又帝都及廣府の復興は國家の體面よりするも市民の幸福より考ふるも眼前の喫緊事、將來の大問題であるから本社は各種の方面より之が促進元備に力を致し其一助として四六版全紙の「復興大地圖」を作製して四月二十日東京廣府の全讀者に配付し、一方地方讀者に酬ゆるには興味深き「時世相」と題する四六四折十六頁の漫畫を附録として配付する等大に發展の方策を講じ又日曜畫報、グラビヤ等も改善に改善を加えて讀者の希望を滿し、少年少女雜誌は更に再び革新を企て安倍主幹、渡邊販賣主事擔任の下に七月號より頁數を増加して發版二百餘頁、月一回發行に改め内容を充實し「少年少女時事新報」の附録其他種々の新機軸を具へて世に現は

る、こゝとなつた、斯の如く對外部的刷新整理が着々として進行する一方に於ては内部的事務の研究向上も駁々として進み、編輯局に於ては大に新進の人材を用ひて紙面の充實を圖り、營業局に於ては神吉廣告部長、三浦部長代理新任後廣告上の改善見るべきものある外、新に曾我精一君調度部長に新任して諸般の整理革新に貢獻する所多く、販賣部亦鈴木部長の下に大に人材を擁護して堅實なる計畫の下に歩一步鞏固なる基礎を築き、會計部は小川部長、橋本、榎原其他諸氏の精勵により克く複雑多端なる事務を整理して誤らず、災後の經營は頗る順調に進展しつゝあるのである。

### 面目一新の工務部

各局、各部の成績向上せるが中にも取分け目覺しかりしは工務部の刷新である、部長熊崎氏は震災二週間に調度部長より工務に轉任し、席未だ暖まらざるに未曾有の大事變に遭遇したものであるが、大塚主事其他諸氏と共に晝夜力行僅か二ヶ月内に克く工務の復興を完成し、進んで諸般大改革の方針を樹て、着々改善の實を示した、由來工務は思想的にも作務的にも亦時間的にも新聞社第一の難所と目された所である、然るに熊崎部長は大塚主事と力を合せて災後非常の場合にも拘はらず社業發達と工場員の幸福を主眼として、工務規定を更改し、職務の制を確立し、思想を善導し、風紀を作興し、從來の陋習を一掃し、人格的優遇の精神を發揮し、作業状態の改善を圖り、能率の増進を企て、物資の節約を期し、給與の方法を改むる等殆ど根本的の革新を施し大に工場員の品性向上を策して何れも豫期の成績を収めた、殊に大正八年七月新聞從業員の要求爭議により東都十六新聞社悉く休刊の餘なき状態に陥つた問題の骨子たる八時間勤務二部制の實施、生活の安定、最低賃金の制定など今日に至るまで未だ何社に於ても實行不可能の状態で従つて勞資兩者の感情疎隔の因子となつて居つたが、斯の如き問題は速かに解決を要するのみならず、要求に應ずるにあらすして寧ろ進



んで與ふべきものであるこの見地から種々精密なる調査を進むることとなつた。時事新報社に於て之まで實行困難とせられた理由は八時二部制は工場の大増員と設備の増加を必要とし、之に對する固定資金約二萬圓、並に一ヶ月經常費約三千八百圓を増加しなければならぬ云ふ點に在る、果して斯の如く本社の負擔を重くしむるものとせば實行の容易ならぬのも無理ならぬことであるが、事實上左までの大増員を必要とすべきか、作業能率は之まで十分論理的に研究されたことありや、災前の勤務時間は單に在社時間を意味せられたるか夫れとも眞の勤務時間を指されたものなるや、之れ能率部長の考慮したる所であつて大業主の調査は深刻精細に此點に注がれたのである、其結果は最も直截明瞭に兩者の共益、即ち本社も負擔の過重を來さずして能率を増進し、工場員は時間を短縮して收入を増加し得る方針の下に八時間二部制の實行可能なりとの一種奇蹟的の斷案に到達したのである、斯くて具體案は作製され最も嚴正なる勤務制に關する能率主義の下に愈々大正十三年二月二十六日より實施することとなり、左しも難問題として數ヶ年間低迷せる本問題も無難作に解決されて、一方に本社多年の言葉を果して他方に工場員一同の満足を得、加へて印刷工場に好先例を發し、勞働問題の一歩を畫し得たことは大いに特筆の價値ありと云はねばならぬのである。

**印刷改善と研究所新設** 時事新報の印刷は多年改良せんとして改良し能はざりし一の暗礁的難問題であつた、之が革新亦能雄氏の任務の一たりしは申すまでもない、即ち復興後種々研究を重ねられた結果假工場時代、物資缺乏、機械不完全の頃に於ても稍災禍に備らんとする状態であつたが新館移轉後は長足の勢いにて印刷の鮮明を加へ越年後工務技師として石原昇龍君を採用して以來益々化學的に印刷其他の研究を發して紙面の鮮麗災禍に比し殆んど隔世の思ひを懐かしむるに至つた、之蓋し工務刷新の事實が驚く讀者の上に表

現せられたる一つの例で四月一日新聞定價値上げの一理由に「印刷鮮明」の文字を用ひられたのは時事新報の過去を顧みて一種の感なき能はざる大考である、印刷上の改善は勿論之を以て満足すべきでない、新聞工場を経営、作業、能率、時間、結果の各方面より眺むる時は我國に於ける斯界の現状には尙改むべき點頗る多く研究すべき事項が極はめて多端である、之等問題を歩一歩づ、解決すべき大目的の下に能率部長は社長及支配人の同意を得て千葉縣市川に工務研究所を設立し石原昇龍君を所長とし四月二十一日より設備準備に取り掛り八月上旬早々事業を開始して第一着手として印刷紙張原紙の新發明を完成すべく全力を盡しつゝある、思ふに工務の前途は極めて多端にして且つ最も多端であり其經營の適否、確へば人事上の問題にせよ技術上の事務にせよ可と否との分る、所は取も直さず一社の興廢漸景の分る、所である、即ち我社工務は今大新聞復興の中心であつたと共に將來又進歩の先驅たらねばならぬものたることは他も之を認め工場員自らも之を自覺せねばならぬ所であらう。

**時事新報要部** 本社社長、重役、株主等は震災と復興後との間に何等異動はないが、編輯局、營業局の要部も亦二三交迭を見たら大體に於て大差はない、茲に前古未曾有の大震災を記念し模範的復興を永遠に傳へべく要部の氏名を記し併せて復興上重要なる役割を遂行せし工務部員一同の姓名を載せて本稿を結ぶこととする。

**重 役**

- |     |      |     |       |     |       |
|-----|------|-----|-------|-----|-------|
| 社長  | 福澤治郎 | 取締役 | 門野重九郎 | 取締役 | 明石徳一郎 |
| 取締役 | 山本昌一 | 同   | 嶋田乙駒  | 同   | 板倉卓造  |







星野國太郎	太田光雄	奥村代一	岡村丑次郎	岡田延治	大河原安治	川島芳之助
加藤春信	上岡義人	笠原範三	金子新吉	狩野武司	横野勇一郎	米谷濱三郎
米村鐵藏	義間倫一	吉田彌次郎	武知元一	田中清吉	田村秀雄	田澤良七郎
竹内金之助	谷口房吉	津田末松	難波留吉	中山榮藏	中里重松	中澤右馬之丞
永田徳太郎	山岡勇	山田安二	山崎矢三郎	保田清之助	松井勝彌	松本彌三次
開根山 義三郎	前田正勝	深川 武	小坂亮吉	小柳徳松	安藤保次郎	新井金次郎
青柳寅之助	足山博義	天野 錫	佐野喜之助	佐藤一義	齋藤角太郎	齋藤喜三
木田樞 彌之助	三代川一夫	遠藤敬治郎	平林 清	平野正義	平井友信	弘瀬眞澄
久野錦七	志水繁次	清水新太郎	神保四朗	鈴木壽助	鈴木福太郎	鈴木禮三
鈴木賢三						
同 植字差 換係	三浦恒四郎	井上敬一	村山未松			
赤田良次郎	高橋秀次郎	生田 茂	飯野時造	長田 倫	長田英雄	横田福太郎
近嵐忠太郎	村元銀吾	松井勘次郎	後藤三二	菅原清吉	橋詰銀次郎	長田秀吉
木村謙吉	柴田 記					
同 解版係						
藤宮 さん	治田武夫	西川竹次郎	西村三郎	西島政雄	藤田弁太郎	井戸きく

飯島はる	若山ひで	加藤はつよ	高橋えい	中島ツル	山岸みよ	小林いね
佐藤やゑ	白鳥みよ	守屋なつ	鈴木しげ	徳島きく	山元なを	福島アイ
同 鑄造係	小林定平					
柿崎 進	遠藤たけ	佐々木しい	塚田ふく	永木さと		
印刷係	小高宗助					
印刷係	石田豊吉	棚刈壬午郎	丸山慶多			
伊藤良策	飯島勝彌	袴塚三治	大川良雄	野野 貢	櫻山寅之助	金安辰造
谷口淋三郎	長岡銀藏	藏方庄次郎	倉持嘉助	山崎順教	安井和吉	小泉直治
江原 彦作	安藤常次郎	佐藤明二	水野康太郎	澁谷幸太郎		
同 鉛版係	千葉庄三郎	増田秀一				
金兒 勇	河村忠雄	谷本友市	成田東之助	辻松太郎	行木 操	日下秀雄
山口祐治	深野達太郎	小關金吾	平野森司	關根新一		
同 鐵板係	中川甲子三		淺野喜助	伊藤林藏	高橋伯矩	
同 ルラ係		村木甚太郎				
宮眞製版係	櫻井 敬	佐藤宥宗	小高富士雄	井澤豊太郎		
五十嵐吾市	五月女 善次郎					

以上



大正十三年八月二十五日印刷  
大正十三年九月一日發行

(非賣品)

東京府豐多摩郡淀橋町柏木一八三  
山 戶 宣 勇

東京市芝區南佐久間町一ノ三  
稻 野 四 郎

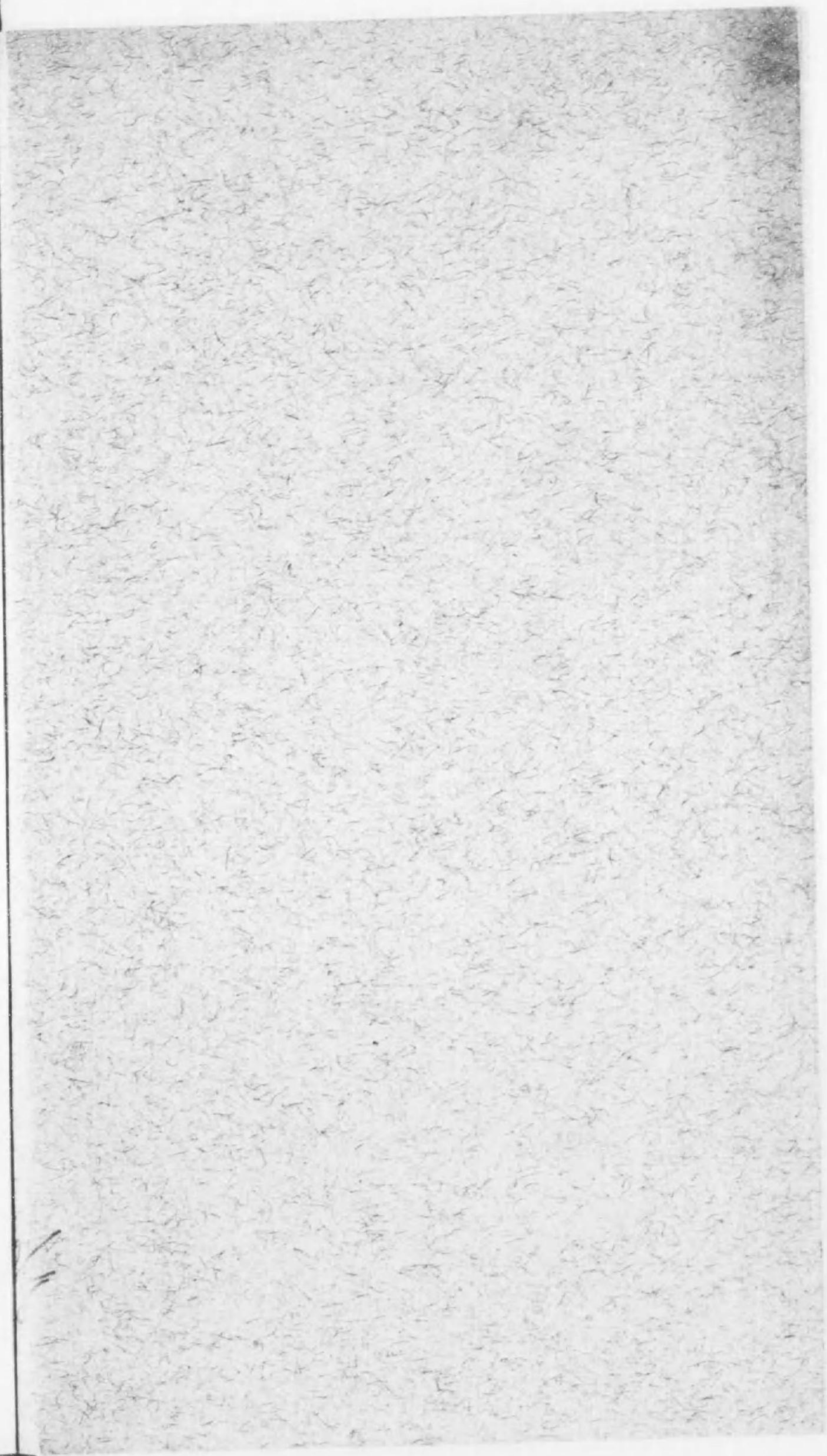
著 者 兼 發 行 者  
作 者  
印 刷 者

同 所 同 番 地

發 行 所

同 所 同 番 地







終